
.. ○真の愛を得るまで.....○. .

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

。。○真の愛を得るまで……○。

【Nコード】

N4719F

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

愛に飢えている麻緒梨は、彼氏を作ってはすぐにフツてを繰り返してしまふ。そんな彼女には心理的病名があった。それは…？
そして、麻緒梨と同じように愛に飢えている男子に出会う。そのま
ま二人は…？行き先の分からない愛を求める二人の物語

プロローグ（前書き）

この小説には性的な描写場面が入っています。きらい。または吐き気がする。気持ち悪くなる。という方は読むのはお控えください。また、この小説のせいで気分が悪くなったなどがありましても、私は一切責任を取りません。御了承ください。この物語はフィクションです。出てくる団体名などは、実際にはありません。

プロローグ

恋愛依存症……って聞いたことある？

あたしってそれなの……。

恋してないと落ち着かなくて。

愛してるとか愛されてるとか実感があまりなくて。

ただ、一人でいることがいやで。

誰かを好きでないとダメなの。

友達はそのなの本当の愛じゃない！なんて言うけど、関係ない。

満たされないよ。

でも、空っぽは嫌だよ。

だから、私は今日も探し続ける。

「好き」って思える人が見つかるまで……。

第1話：あの頃のあたし。

愛ってよくわかんないよ。

こんなあたしだから。

あなたに出会えたのかは分からないけど。

あたし達は似たもの同士だったよね ……？

外見は似てないのに。

あなたも愛に飢えていて ……。

あたしも愛に飢えていた ……。

あなたに出会うためのカウントダウンはいつから始まったのかなあ？

あなたの一言があたしに運命を変えるためのサインを出してくれた。

じゃなかったら、きっとあたし、あのまま何度も同じこと繰り返してたと思うの ……。

ねえ？

ありがとね ……？

この日はいつも通りだった。

あたし、如月^{キサラギ} 麻緒梨^{マオリ}は、彼氏と別れて一週間が経とうとしていた。早く新しい彼氏が欲しくて、イケ面がいると噂のある カフェに行く予定でいた …。

「ミヨナ」 カフェ、メツチャ楽しみだね
「そうだね。」

「早く彼氏ほしーな……。」「

「もー。麻緒梨はあ。この前彼氏と別れたばっかじゃん!」

「もう一週間も経っちゃったもんっ!」

「しか。でしょ!しか!」

ミヨナってば、今日もさっぱりしてるなあ……。茶髪にショート。背はあたしと同じくらいで。

けど、格好いいんだよね とにかく!

「そーゆーミヨナは、彼氏欲しくないのお?」

「欲しいに決まってんじゃん!あいつと別れて半年だよ!?」

半年も彼氏いなかったら、あたしだったら死んじゃうけどなあ。

大げさって言われるけど、あたしからしたら、全然大げさじゃないんだから。

この時、あたしはまだ自分の病気を知らない。

自分の心理的病名を …。

第1話：あの頃のあたし。

ミヨナとあたしは今。

廊下で話してる。

そして教室に入るとまた話します。

ガタンッ。

ガタン……？

「彼氏彼氏うるさいなあ。」

「ヨミ！また本ばっか読んでたのお？」

「彼氏なんてまだ16なんだから、いらないよ。」

「えー！無理無理！」

「ヨミは堅物だよねえ。もう16って言わない？麻緒梨は、中身チャラチャラだし。」

「中身チャラチャラだとおー！？ひどいなっ！」

ヨミとミヨナは、幼なじみらしいんだけど、こつも性格が違う二人が今だに親友ということが謎……。。

あたしはヨミと同じクラスでミヨナと友達ってこともあったから、結構仲良くなったけど違うクラスだったら、一言も話してないと思う……。

「ささ。とにかくあと2時間頑張りましょ」

「あと2時間もあんのぉ？」

あたしは机に突っ伏した。

「ほらぁ。 カフェ行くんでしょ？」

「うん！」

「いってらっしゃい。」

ヨミを誘ったこともあったけど、行かないって言うんだよね……。

放課後

やっと終わったぁ

ミヨナとはクラスが違うから校門で待ち合わせ。

ゾロゾロと帰る生徒のなかにミヨナを発見！

「ミヨナ〜!!」

ミヨナはあたしを見つけると半分苦笑いで言った。

「遅い！麻緒梨のクラスはいつでも遅くない？誰か毎日怒られてんじゃないの？」

「ミヨナのクラスが早いだけでしょう？」

「ち。ほらいー」

「うん！」

そしてあたし達は他愛もない話をして盛り上がった。

駅でおりてまたしゃべってた。

そこであたしははたと立ち止まった。

「麻緒梨〜？」

誰かこっち見てる……。

これが ……。

あたしたちの出会い ……。

第2話：ターゲット

ギヤアギヤア騒ぐ女ほどしつこくてろくな女はいなかった。

「本当にあたしのこと好きなの!？」ってな。

いろんな女がいる。

でも案外俺の知ってる女はケツ軽ばっか。

今度ナンパするときは慎重に……。

目に飛び込んできたのは黒くてくせっ毛な感じの女子。

隣には黒と同じぐらいの背の高さの茶髪ショート。

ターゲットは決まった。

黒髪女子だ。

見ていると黒髪のほうは立ち止まり、俺と目が合った。

そして俺は歩み寄り声をかける。

いつも通り。

「君ら今暇？」

って……。

この時の俺はどうでもよかったんだ。

誰でもよかった。

ただ、俺を受け入れてくれる人がいれば。

俺を受けとめてくれる手があれば。

誰だってよかったんだ …。

簡単に声をかけたはずだった。

この時は …。

「暇だったら、一緒に遊ばない？」

「んー。いいよ」

「ちよつ。ミヨナ!?!」

この茶髪で傲慢そうなのはミヨナというらしい。

「へえ。ミヨナちゃんって言うんだ?で、君は?」

「この子は麻緒梨って言うの!」

おめえに聞いてねえよ。

「人の名前勝手に教えないですよ!」

とにかく、ターゲットの名前は分かった。

「俺、悟夢サトム！よろしくな！」

「よろこ

「あ。よろしく……。」

「ねえ。アド交換しない？」

このミヨナとかゆうの、邪魔。

「じゃ、二人ともケータイ出して！」

「あたしも!？」

当然っしょ？

そして追加された二人の名前。

のちに俺はミヨナに振り回される。

ミヨナは、強引だ……。。

俺に麻緒梨に近づく隙さえくれない。

夜もやつからばっかりメールがくる。

メールの内容も読みづらい。

もう無視だ。無視。

「ミヨナ。ちよっく???もう寝ちゃッタ／＼??無視カ
ナ
「エイヨネ??」

またきた……。

第3話：朝カフェ

ミヨナ……。

大丈夫かなあ。

悟夢君が好きになったみたいだけど……。

ヴヴヴッ

ベッドの上に座り込んでケータイを見ると、メールが2通入っていた。

「悟夢。（無題）今日は元気なかったっぽいけど、大丈夫か？」

見かけによらず優しいんだ……。

悟夢君……。

「麻緒梨。返事遅くなってごめんね……。心配してくれてありがとう
大丈夫だよ」

送信。

もう一通は……。

「ミヨナ。麻緒梨い〜？起きテノレ〜？？聞シエテヨ！！（-公-）
悟夢からメール来なクなっちゃっタノ！！！」

相変わらず読みにくいなあ……。

しかも、もう悟夢って呼んでるんだ……。

「麻緒梨。そつかあ。あたしこれから寝るところ！ZZZ・・・悟夢君も寝ちゃったんじゃない？」

これでいいかな。

そしてあたしは寝てしまった。

だって。眠かったんだもん……。

。。。。。。。。

ケータイのアラーム音であたしは目覚める。

オレンジのカーテンから差し込む光はとても明るくて、電気もいらない。

ムックリ……。

起き上がるとあたしの顔はお決まりと言ってもいいくらいこれ。

目は半開きでくせつ毛は爆発。

ノソノソと起き上がり、顔を洗い、嗽を済ませ、グチャグチャにほつぽってしまった制服に着替え、髪を梳かす。

スクバを引つ掴むと誰にも会わないように。そしてうるさくしないように気を付けながら寂しく

「いってきます。」と言うと扉を閉める。

リビングはいつも騒がしいけど、あたしはリビングには入っていない。

喧嘩してるわけじゃない。

けど、これが毎朝のあたしの日課……。

喧嘩なんてもう何年してないだろう……？

電車に乗って、朝ご飯をコンビニで選ぶ。

グブグブツ。

メール？

「悟夢。オハ。朝からコンビニ〜？」

え？

。。。。。

いきなりケータイになる。

え！？えっ！？

悟夢君!?

あたしは慌ててコンビニを飛び出し、電話に出ていた。

「朝からコンビニっすか?」

あたしの中はただ一つ……。

「どうして……あたしの居場所……。」

すると肩を叩かれ、後ろを振り替えると……。

「ここにいるからさ。」

落としそうになったケータイからも「ここにいるからさ。」って聞こえてきた。

あたしは錯乱する。

でもやっぱり疑問は一つ。

「何でここに……?」

「んー?何となく?」

そう言っつて悟夢君は笑った。

「あ。あたし、朝ご飯まだなの。じゃあね!」

「俺もまだだし!一緒に食おう?」

「いいけど……。」

「んじゃ、あそこ!」

「ええ!? 高くない!?!」

だって指差したのはカフェだったから

…。

第3話：朝カフェ

俺はカフェにいた。

とにかく、デートまでこぎつけなければこっちのもんだ。

なのに……。

今の俺は何をしている!?

のんびり朝飯食ってる場合かよ!?

麻緒梨は、まだゆっくりと食べていた。

そして、沈黙を破ったのも彼女だった。

「あたし、悟夢君のこと、誤解してたみたい。ごめんね……。」

「誤解?」

「うん。悟夢君って、体狙いだとばかり……。」

うっ。

結構痛いところくなあ。

「それで、身構えちゃって……ごめんね?」

「リアルなこと言っちなよな。H以外の頭だっただけあるわ!」

へえ。あつたんだ……。

「プツ……なにそれ！真面目な顔して何言つのかと思ったら！」

あ。いい雰囲気？

「今度二人だけでどっか行かねえ？」

「え。ミヨナは？」

「振り回されるからなあ。」

「ふーん？うん。いいよ どこ行く？」

すなりOK……？

俺、信用されてる？

「映画とか？」

「いいかも 何見る？」

「何でも。」

「そっかあ。」

色々と話してるうちに彼女はいきなり立ち上がった。

「もうこんな時間！？学校始まつてるよ！」

ふーん。学校か。

「さぼっちゃえば？」

「ダメだよ！そんなの！」

「そんなに俺といるのが嫌？」

すごく哀れっぽそうに言ってみる。

すると彼女は笑って言った。

「ううん。学校忘れるぐらい楽しいよ」

そういいながらも行くこうとする彼女を俺は抱き締めていた。

どうしてそうしたのはわからない。

ただ、離れるのが嫌だった。

失ってしまいそうで恐かった
…。

第4話：あたしの知らなかった病名。（前書き）

この章には、「第4話」依存症が治らないらしきことが書いてありますが、治ります。主人公はその方法を知らずに真の愛というものを探す設定にしております。

第4話：あたしの知らなかった病名。

いきなり抱き締められて、あたしはどうしたらいいかわからなかった。

「イタッ。」

力強いよ……あたし、潰れちゃうよ……。

「ごめん。もう少しこのままで。」

しばらくして、態勢が辛くて動こうとしたら、もっと強く抱き締められた。

「痛いよ……悟夢君？」

その時、あたしは悟夢君の腕が震えていることに気付いた。

「……大丈夫だよ。」

不意に出た言葉。

「恐がらなくてもいいんだよ。」

なぜか悟夢君を抱き締めていた。

何を言っているのか自分でもよくわからない。

でも、たぶん安心させてあげたいそれしか頭になかったんだと思う。

あたしはトラウマがある恋愛依存症だった。

悟夢君は恋愛依存症気味だとか。あたしほどひどくないんだ……？
どっちも原因は愛の不足。親からの愛が感じられなかったもしくは一番親の愛が欲しいときに受けられなかったのどちらか。

「ねえ。悟夢君はさ。」

「悟夢でいいよ。」

「あ。うん。小さい頃に何かあった？」

「何で？」

「あ。ううん。言いたくないならいいの。幼少時代が原因ならって思っただけ。……あたしは。あったから……。」

「そうか。」

「こんなあたしでもさ、役に立てるなら、話してほしいんだ。」

「ああ。いつかな。」

「……うん。」

そこに留まってる事が辛くて、あたしは逃げた。

電車に乗り、ケータイを開く。

メールも着信履歴もたくさんのにヨナって字で埋まってた。

メールを返す気になれなくて、あたしはケータイを閉じた。

ねえにヨナ …。

あたし恋愛依存症だって …。

あたし自身が愛されてるって自覚して、真の愛だっと思えるまで治らないってことだよね …？

でもさ、真の愛って、何 …？

第4話：俺の知らなかった病名。（前書き）

ある病気を　　が原因！と断定していますが、実際はそれ以外のことが関係してきて　　だけが原因とは本来ならば考えられません。設定上一つの事柄をメインとしていますので御了承ください。

第4話：俺の知らなかった病名。

俺は恋愛依存症気味だとか言われた。

確かに愛なんてよくわかんねーし、あるのかさえわかんねえ。

けどそれは、だれもが同じだと思ってきた。

俺にそーゆーのがあるとするなら、何故DVにはいかなかったのだから。

俺の場合。

誰にも話したくない過去がある。

それは確かに家庭や幼い頃に関係はしているが。

大体はDT「Domestic Troubles」 家庭内トラブル、家庭のイザコザ
からなる、DV「Domestic Violence」 家庭内暴力

が多いのではないのか？あれも原因は大抵愛がからんでくると言うじゃないか。

また、俺には外見上や出会い上、

薬中 薬物中毒 にも、

アル中 アルコール中毒 にも、

タバコ依存 タバコ依存症 にもなれたはずだ。

なのに何故、恋愛依存症 ……？

考えても分かるわけがない。

ならば、考えなければいいんだ。

ただそれだけ。

麻緒梨は、優しい。

自分こそ恋愛依存症って言われてるのに俺を救おうとしてくれた。

けどさ。

どうにもなんねーよ。

俺。

だってこの過去は。

俺の幼少時代は。

相手が女だろーと男だろーと人じゃなくても。

誰にも言いたくねえんだ ……。

過去は過去なんだよ。

忘れてえんだよ。

けど。

忘れられないからこーやって引きずってんのかなあ？

こーやって依存症気味だとか、診断されてんのかなあ？

それだったら、俺が生きてる意味って、一体なんなわけ？

親に反発して好きなことに酔い痴れて、世間とかゆー腐った奴らから白目で見られてる俺が今ここにいる理由。

ときには物盗んで、ときには金奪って。

それでもみんなな過去を忘れられるときなんか一瞬で。

一体俺は何をしたかったんだろ …。

第5話：麻緒梨の悲しき過去。（前書き）

今回「麻緒梨の悲しき過去」には少々グロテスクなシーンがあります。体調不良や血を想像するだけでもいやと言う方は読まないほうがいいと思います。この小説を呼んだせいで体調不良をおこしたという読者さんがいらっしやいまして、私（筆者）は責任を負いかねます。体調や血などのグロテスクな描写場面などが大丈夫かどうか確認してからこの章を見ることを私（筆者）は読者の皆様におすすめます。

また、内容を少し修正させていただきました。すみませんでした。

第5話：麻緒梨の悲しき過去。

結局、あたしは何がしたいのか自分でもよくわからずにいた。

愛を与えるよりも、愛を求めるほうが、あたしにとって簡単だったから……。。

恋愛依存症……。

恋愛依存症……。

エコーのようにあたしの脳裏に繰り返される私の病名。

過去の出来事が原因なら。

心当たりがたくさんありすぎて困るくらい。

今もほら。

弟や妹たちが騒がしいくらい。

あたしは今、ここにいる住んでいる女性をお母さんと呼ぶことができない。

それは彼女だけじゃない。

あそこのソファアにごろりと横たわってる男性もお父さんとは呼べない。

また、あたしよりすこし年上の男性もお兄さんとは呼べない。

呼べるのはかるうじての、3歳のやんちゃ坊主。

宏 ヒロのことを弟。

そして、まだ1歳の ゆず のことを妹。と言えるくらい。

この家庭にいつもあたしの影はない。

朝ご飯だってバイト代で最小限に控えておやつは長持ちするガムを
たまーに買うくらい。

お昼も軽食ですませて、バイトに労力費やして。

バイトが終わるといい男探して。

たまに晩ご飯おごってもらったりで。

そんなんで帰りはいつも遅くなるけど。

飯の姿でしかない家族はあたしの心配なんてしない。

だってあたしはこの家族の本当の子供ではないのだから
∴。

あたしのほんとの家族は。

あたしだけを残して。

逝っちゃったもん……。

お爺ちゃんやお婆ちゃん。お父さんやお母さん。

楽しい旅行になるはずだった。

本当はあんなはずじゃなかった ……。

麻緒梨当時5歳。

とっても親馬鹿な両親で、あたしが小学生になるのをとっても楽しみにしてた。

親の欲目か、よく二人はあたしを可愛いといって頭をくしゃくしゃに撫でたり、頬摺りをした。

あの日も。

そうだったよね …。

小学校入学祝いに家族みんなで旅行行こうって。

お爺ちゃんやお婆ちゃんまで無理矢理巻き込んで。

みんなとっても楽しそうにしてた。

あたしも楽しみだった。

この時はピクニック ぐらいにしか考えてなくて。

まだまだあたしも甘えたい盛りだった。

あたしはピカピカのランドセルが嬉しくて。

自分の荷物をランドセルに入れてくんだ！って聞かなくて。

車のなかでもずっとランドセルを抱っこして、ランドセルの皮の匂いを嗅いでくさい！って言ってたっけ。

でもいきなり車は揺れ初めて、そこからさきの記憶はない。

こんなにも鮮明に覚えてるのに。

鮮明な記憶は私に優しくなんかない。

目が覚めたらまだ視界がぼやけてて。

目蓋が重くて。

私は知らない場所に寝かされていた。

頭は重くて。

体中包帯だらけ。

ぬるま湯でさえ一人で飲めなくて、ナースさんがいつも誰か一人。

あたしに付きつきりだった。

近くにはあんなにピカピカだったランドセルが薄汚れて傷だらけになり、背負う部分は裂けて、とても背負える状態じゃなかった。

ランドセルの中にはいつもお気に入りと一緒にいるうさちゃんが少し綿が見えてる状態で中に入った。

取り出してみるとうさちゃんは茶色かった。

しけっけていて。

生々しく茶色い。

おまけに茶色が手に付いて茶色はとても鉄臭かった。

そう。

茶色は……。

血だった。

あたしはうさちゃんを投げ捨てることと自由に話すことのできない口で
めいいっぱいお母さんやお父さんやお婆ちゃん。お爺ちゃんを呼ん
だ。

ヒステリーが納まるとあたしはベッドの上でうずくまっていた。

そして親戚の家をたらい回しにされ、今いるのがこらえてわけ
…。

あたしに残ったのは、生々しく鮮明ないやな記憶と写真。

あたしもまだ小さくて。

両親もまだ若い。

観覧車の前で三人そろって満面の笑みでピースをしていて。

私はお父さんに肩車をされながら片手にピース。

片手にアイス握っていて。

お母さんはあたしの背中を片手で押さえて片手でピース。

お父さんはあたしの足を片手で押さえ、片手でピース。

。。*。。。

—みんな。—

—幸せそう。—

’。。*。。’

あたしに残ったのは、その一枚の写真だけなんだ …。

第5話・悟夢の悲しき過去。（前書き）

こちらの章「悟夢の悲しき過去。」にもグロテスクな表現や、虐待などの描写場面があります。控えてはあるものの、ダメな方は見ないほうをおすすめします。この章でも読者の方々に体調不良などがありましたら、私（筆者）は、責任を負いかねます。体調や好き嫌いを確認のうえ、小説にお入りください。

第5話：悟夢の悲しき過去。

俺はもとはと言えば。

あの母親のせいだと思う。

今や警察につかまっていねーけどよ。

いや。実に滑稽だな。

親父の関心はいつも仕事や俺の成績しかいかねえんだ。

あのババアと離婚した今でさえ。

もとはと言えば。

あのくそババアのせいだ。

俺の誰にも言いたくない過去は。

奴からの虐待から始まったんだからな。

あの女はいつも俺が悪いと叱った。

罵った。

怒鳴り付けた。

幼かった俺は、必死に誤った。

きちんといい子にしてもそれが認めてもらえるはずもなく。

俺はきつちんにつれていかれると、手を火あぶりにされた。

あのババア、一度は俺の指まで切断しようとしやがった。

今でも覚えてる。

自分の手から湧きだしてくる赤い血液。

生暖かくて、少し、鉄臭かった。

ポタポタとしたたる血が、気持ち悪くて。

俺は気絶したんだ。

悟夢当時6歳。

小学校初の夏休みのことだった。

いつものようにおとなしくしていた。

親父にSOSをだしてもちっとも気付かない。

やつの興味はいつも仕事と俺の成績。

今でもそれはかわらない …。

何よりもババアのほうはもっとひどかった。

やつは虐待以外にも窃盗をしていたらしい。

夏休みに警察に逮捕され、虐待もバレて、親父と奴は離婚をする。

奴は俺を名前で呼んだことはない。

いつも、“それ”や“あれ”だ。

離婚理由は簡単だった。世間からの目しか気にしない親父は、奴の逮捕について、自分の印象が悪くなるから離婚しよう。と。

その頃ババアは俺。いや、俺たちに向かって言った。

「いいよ！あんたなんてこっちからお断わりだあ！ただし、それもあんたの方で始末してよね！」

俺が最後に聞いた母親の声。

いつも俺を見下し、おとしめ、嘲笑っていたババアの声。

結局俺は世間体しか気にしてはいない親父に引き取られてったんだ。

それからしばらくしたのちに俺は傘を壊し、びしょぬれで帰っていた日があった。

怒られるかと思った。

でも、帰ってくるとそこには電話をして、書き物をし、俺に背を向

ける親父の姿しかなかった。

「おかえり」とも、

「何で濡れてるんだ？」とも聞かないただただ無視されるだけの存在。

それが俺だった。

今も俺の手には切断されかけた傷跡が指輪のようにブツクリとあとが残っていて見るのさえいやになる。

ポツリ。

雫で我に返った俺は空を見上げた。

ポツリ。

真っ暗でどんよりと曇っている。

ポツポツポツ・・・。

俺はビルに駆け込んだ。

サア　。

雨が沢山振る。

今はただ。

過去と麻緒梨を思い、ぼーっとするだけだ。

第6話・散らばるトライアングラー。 麻緒梨

いつのまにか気付くとあたしは寝ていたらしくベッドのうえにいた。

よくよく見るとメールが何件も入っている。

ほとんどがミヨナからのメールだった。

朝。学校で誤ろう……。。

学校

朝からたつぷり先生にしごかれてしまった。

「はあく朝から最悪う……あ、ミヨナ！」

あたしはミヨナに駆け寄ると言った。

「昨日はごめんね！あのね。怒らないで聞いてほしいんだけど、昨日悟夢君といたの。学校さぼっちゃった。」

「まだ君付けなんだ？何もなかったのね？」

「う……うん。」

抱き締められたことは黙っておこう。

「もしかして、ミヨナ、悟夢君のこと、狙ってるの？」

「とーぜん。」

どうしよう。あたし、悟夢のこと。好きなのに。

ううん。あたしは誰だってよかったじゃん。

恋愛依存症だから……？

でも、親友は応援すべき！あたしにはきつと他があるよ！

さっそくあたしは放課後駅をふらついた。

ナンパされたらおとなしくついて行ってやるか。って感じだった。

「ねー彼女お」

げっ！ブサ。却下！

「ごめんなさい。あたし、用事があるので失礼。」

「そんなこと言わないでさあ。」

「やめてください！来ないでください！」

グイッ。

「わっ！？」

「何やってんの？誰の女に手え出してるわけ？」

は？

誰？

あたし誰のでもないっすけど……？

「うち。」

ブサ退却。

「え、あ。あの。ありがとう……。」

「別に。」

「名前聞いていい？」

「礼ならいらねーよ？」

「いや、言ってないし。」

「ジョーダンだって。俺は桐原 雅也 キリハラ マサヤ 君は？」

クールだと思ったら、明るいんだ。この人……。

「あたしは如月 麻緒梨。」

「おし。よろしく麻緒梨。」

その後一緒に遊んで一緒に過ごして。

楽しくて悟夢君なんて忘れられるって思えた。

あたしたちは何度かデートらしきものを重ねた。

「なあ。麻緒梨。一目惚れって信じる？」

「あー。たまにあるよね。」

「俺、おまえに一目惚れしたんだよね。」

「へっ？」

「俺と付き合ってくんない？」

「……いいよ。」

この時は自分に嘘ついてても全然平気だと思えた。

悟夢君なんて今までみたいにくすぐ忘れちゃうに決まってるって。

だってあたしは恋愛依存症だから ……。

だから、みんなと違って自分に嘘ついててもすぐ忘れてこの人（雅也）を好きになれるって ……。

第6話・散らばるトライアングラー。 < 悟夢 >

ただ、誰でもいい。

愛がほしい。

そして誰かを愛していたい。

誰かを好きでいないと落ち着かない。

誰かに好かれていないと休まらない。

けど、今ほしいのは。

何故か麻緒梨の笑顔だった。

麻緒梨がそばにいた時間は夢のようでとてもやわらかかった。

いつも不安や落ち着かない気持ちの俺も、麻緒梨といるときだけは不安にならずにすんだ。

何故今ここに麻緒梨はいない？

何故今ここにミヨナがいる？

ミヨナは一人で舞い上がって一人で騒いでいる。

この間なんかいつのまにかラブホの前について、“この俺”が“めずらしく”する気になれなかった。

こんなことってあっていいものなのか？

いいや。いいはずがない。けど、こいつ（ミヨナ）とはしたくないんだ……。

俺、麻緒梨が好きだ ……。

メールしても、最近は返信される数が少ない。

すると、麻緒梨と誰か男が笑いながら一緒に歩いてる姿を見つけた。

「っ。」

それを察してか、ミヨナが俺に言った。

「あの二人、付き合ってるんだよ……ね？」

俺はつかつかと歩き出した。

麻緒梨は、俺に気づいて、息を詰まらせた。

「麻緒梨。そいつ、誰？確か麻緒梨今フリーだったよな？」

すると麻緒梨は顔を背けた。

「俺？麻緒梨の彼氏。あんたこそ誰？あ、そっか。麻緒梨の追っかけか？悪いね。麻緒梨は俺がもらったから。」

最高にむかつく事を言う野郎だ。

「それ、本当？」

麻緒梨は、顔を背けたまま動かなかった。

「ねえ。悟夢く。こっちは彼いるんだからさ？・・・」

「麻緒梨は、本当にそれでいいのか？」

ちつとも楽しそうじゃない。

あの時俺といた麻緒梨のほろがよっぽど楽しそうだった。

「・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・私・・・・・・・・悟夢君とは付き合えない・・・・・・・・。」

「は？なに？じゃ、あの顔は嘘だったわけ？全部全部。嘘だったわけ？」

「私はあ、恋愛依存症だから・・・・・・・・悟夢である必要のない・・・・・・・・。誰でもいいの。私をすきっていつてくれれば。誰だっていいの・・・・・・・・悟夢くんはあ、その中の1人に過ぎなかったの・・・・・・・・。」

ゆっくりと麻緒梨はしゃべる。

泣きそうな声で。今にも消えそうで。小さく震えていた。

本当にそれでいいのか？

本当にそれで幸せなのか？

「ごめん……悟夢君。もう、何も聞かないで……」

何の音も俺の耳には入らなかった。

周りのすべてが一瞬にして動かなくなつて。

音もなくなつた。

「わかつた……結局、俺は都合のいい男だつたってことか？」

そう言つて歩き出した。

誰の声も俺の耳には入らなかった。

どうでも良くなつたはずなのに。

何でだ？

すごく泣きたい気分になるのは。

俺だつて最初は誰だつて良かったじゃないか。

自分を受け入れてくれる手があれば。

誰だつていいって思つてたじゃないか。

俺には、麻緒梨を攻める資格なんかない。

ないはずなのに。

ミヨナのうっとうしささえ気づかぬまま俺は自分の部屋にいた。

一人で自分の部屋に横になってた。

無力な俺。

無力以外の何者でもない。

ただの自分が、“そこ”にはいた……………。

第7話：嘘偽り。 <麻緒梨>

私たちが歩いてると悟夢君がいた。

なんで？

何で見つけちゃうんだろう？

何で。

何で見つかったちゃうんだろう？

「麻緒梨。そいつ、誰？確か麻緒梨今フリーだったよな？」

ただ苦しくて、私は顔を背けた。

「俺？麻緒梨の彼氏。あんたこそ誰？あ、そっか。麻緒梨の追っかけか？悪いね。麻緒梨は俺がもらったから。」

その言葉が私にとっても痛かった。

何かを突き刺していった。

「それ、本当？」

苦しくて、苦しくて。

動けなかった。

「ねえ。悟夢く。こっちは彼いるんだからさ？・・・」

「麻緒梨は、本当にそれでいいのか？」

ミヨナの声がした。

そうだ。

悟夢君は、ミヨナの彼氏になるんだ。

私のじゃない。

ミヨナには幸せになってもらいたいし。

前みたいな想い・・・。

してほしくないから。

「・・・ごめん・・・。私・・・悟夢君とは付き合えない・・・。」

その一言だけで精一杯だった。

「は？なに？じゃ、あの顔は嘘だったわけ？全部全部。嘘だったわけ？」

いたい。

いたいよお。

悟夢君……………。

「私はあ、恋愛依存症だから……………悟夢である必要のない……………。誰でもいいの。私をすきっていつてくれれば。誰だっていいの……………悟夢くんはあ、その中の1人に過ぎなかったの……………」

やだ。

泣きそうだよ。

ないちゃ駄目!!

「ごめん……………悟夢君。もう、何も聞かないで……………」

「わかった……………結局、俺は都合のいい男だったってことか……………」

私は顔を上げた。

でも、もう遅かった。

私は望んじゃいけなかったんだよ。

すべては。

ミヨナのため。

だって、ミヨナは……………。

1回、男性恐怖症になりかけたんだよ？

それ以来。

男子と仲良くなってもなかなか彼氏までいけなくて。

それを直すために男子に免疫つけて。

それでここまでできたの。

やっと作った好きな人も。

軽くて。

必死でアタックしてたのに。

それが逆に誘ってるって。

売春に近いようなこといわれて。

それでやっと悟夢君に出会ったのに。

それであんなふうに幸せそうに笑ってるのに。

私なんか。

お呼びじゃないんだよ。

「麻緒梨〜？」

L1 たらしくメールくんL1ノ。」

「Re: わかった。うん。ごめんね。私は、ミヨナのことについても応援してるから。」

もう、自分に嘘をつくのもなれたかもしれない。

悟夢君のアドレスを消そうとした。

でもなんでだろう。

消せなくて。

ケータイを握り締めたまま固まってしまっていた。

結局、私は自分にも他人にも嘘を並べて、その嘘につきりきる
ことができない中途半端ものなのだ……。

第7話：嘘偽り。 <麻緒梨>（後書き）

ケータイが壊れてしまいました。

次回作も遅れてしまいかもしれませんがよろしく願います。

第7話・嘘偽り。 <悟夢> (前書き)

今回はちょっと喧嘩で血などの描写場面がありますので苦手な方は
おすすめできません。

第7話：嘘偽り。 < 悟夢 >

結局麻緒梨にあんな責めるようなこといったけど。

俺だって同じようなことしていたのだ。

ミヨナから来るメールがうっとうしい。

そのくせ、麻緒梨から「彼氏じゃないよ」ってメールがほしいと思うなんてほんとどーかしてる。

しかも、そんなメール来るはずなのに、メール一通、電話一本来ない麻緒梨が自己中なきがしてくる。

もういやだ。

麻緒梨からのメールを待つのはやめよう。

さっさとケータイの電源を切って終わらせてしまおう。

寝てしまおう。

次目が覚めたときは今までのことが夢であるように。そう願うことしかできない。

ヴヴヴ………。

何通にも溜まったミヨナからのメール。

最後の一通だけに目を通す。

「あーね。さつきちゃんト麻緒梨に釘刺しとリータよ???もう、サトには近ヅかなしーっテ約束させタよ。」

余計なことすんなよ。

ただでさえくるかわかんねーのに。

これじゃぜってーこねえ………。

なあ。

麻緒梨。

お前のことこんなに攻めてんのに。

何で攻め切れねーのかな。

俺さ、お前のこと攻め切つてとことんまで攻めきつて楽になりてえよ。

お前のこと、嫌いになりてえよ。
なのに。

なんで俺の中にとどまるんだよ？

消えてくれよ。

さっさと消えてくれ。

俺のところに来る気がないなら。

もう二度と。

俺の目の前に現れないでくれ。

「っ……………」

だめだ。寝れねー。

散歩でもすつか。

ふらふらと歩き、ぼーっとする。

いらついでんのか。むなしなのか。

わかんねー……………」

ただ、今は何にも考えたくない。

そのまんま居座り続けて日が暮れることに気づかなかった。

なのに、歩いてくる人影がすぐに痲緒梨だと気づいてしまったのは

何故だろう。

「悟夢……………君？」

そう口が動いた気がした。

実際暗くてよくわかんない。

でも、向こうも気づいたらしい。

すぐに。

俺のことを。

もうやめてくれよ。

俺の前に現れんな。

俺の手にはいんねーなら。

俺なんて見つけないでくれ。

そんなこと思ってたのに。

「おう。」なんて話しかけてる自分は何なんだろう。

いつからこんなに自分を偽るのがうまくなったんだろ……………。

俺……………。

「……………ごめん……………ね。」

「何が？」

言うなよ？

続きを言うな。

忘れさせてくれ。

もう一度お前の口からあんなこと聞きたくねーから。

「……………悟夢君？」

「何？」

「なんでもない……………。」

「何で泣き声なわけ？」

慰めよーとかおもっちゃうじゃん？

何？策略？

「ミヨナには幸せになってほしい……………だから私しか傷ついてないんならそれでいいの。なんだ、そっか？悟夢君は全然平気なんだ？なら良かった。」

何がいいんだよ？

全然よくねーよ。

わけわかんねーよ。

大体ミヨナには幸せになってほしいってなんなわけ？

自分はどーすんだよ？

俺の気持ちはどーなんだよ？

「……………う……………じゃ、じゃあね！！！」

あほ。

ないてんじゃねーよ。

涙我慢してんじゃねーよ。

あほじゃねーの？

おまえも。

些細なことにも気づくおれも。

大体もう開放されたい。

このキモチから。

なのに何で俺は麻緒梨を追いかけてるんだ？

麻緒梨を中途半端に引き止めてどうすんだよ？

今の俺には。

麻緒梨をつなぎとめておくものはない。

やめよう。

もうやめよう。

追いかけても答えはわかってる。

追いかけるのはもうやめよう。

いなくなればいい。

消えてしまえばいい。

いつか俺もあいつを忘れる。

あいつも俺を忘れる。

「・・・っ・・・ハア・・・カッコ悪。俺。」

どっかに見失った麻緒梨のかけ。

そうだ。

忘れよう。

あいつは俺にそれを望んだ。

あいつ自身もそれを望んだ。

嘘もつき続けりゃ本当になっるっていうじゃねーか。

そしたらミヨナともすっぱり縁切って他の女を捜そう。

恋愛依存症・・・。。。

あいつと同じ病気。

でも。

あいつは俺より重症。

それだけで十分違う病気だ。

あいつと俺を頭の中でつなげるのはやめよう。
家に帰る。

タバコくせえ。

「あー。なんか着た。」

「何しに来た？てめー男んどこいつてたる。」

「あー。うるさいなー金がないのよ。それにうるさいのがもう一匹
いちゃかなわないわ。ちよっとさーあんたどつかいつててよ。女に
でも貢がせたら？あんたのことだし？女くらいいるんでしょ？」

「ふざけんなっ！！くそばばあ！！」

家を飛び出した。

なんか。

何もかもがうまくいかねー。

どうしたらいいのかよくわかんねーし。

ムシヤクシヤする。

「あ、てめー悟夢とかゆーやつだろ。」

「ああ？」

「先輩。そいつです。いきなり殴りかかってきて、俺らじゃ歯が立
たなかったの。」

「いつの話だよ……」

「忘れてんじゃねーぞ！？先週だよ！！」

覚えてねーよ。弱いやつのことなんか。

「まあ、いいや。ついてこいよ。」

ま、いいか。

ムシヤクシヤしてるし。

いきなり殴られた。

から殴り返してついでに蹴りもかましといた。

俺のこぶしが血に汚れてく。

相手のこぶしも俺の血に汚れてく。

殴っても殴ってもむなしくなるこのキモチはなんだ？

麻緒梨………？

と、次の瞬間不意を付かれてパンチがみぞおちに食い込む。

「……………つう！！ごほっ！！」

地面に倒れこむ。

後は袋叩きにされる。

「やめてえ……………おまわりさん！！はやく！！こっちは！！

！！」

げっ……………。

みんな散つてく。

「大丈夫！？」

女の顔はわかんない。

「悟夢君！！あたしだよ！！ミヨナだよ！！大変……………傷が

……………」

ああ？わけわかんねーなんでミヨナ？

「平気だ。それより。」

「おまわりさんなら来ないよ。」

んなこときいてねーよ。

「なんでここにいるんだ！？」

「あたしの家、そこだから。」

はあああああ！？

そして俺はミヨナの部屋に連れ込まれた。

第7話：嘘偽り。〈悟夢〉（後書き）

悟夢の家は今、お父さんの愛人と同居しています。

愛人はお父さんの前では真面目ぶっていますが、本当はとんでもない人で、お金しか目にはいらぬような人です。

説明不足でごめんなさい。

。。。。

それでも悟夢君を探してるあたしって何なんだろう？

たむろってる人たちにいろいろ聞いてみた。

命からがら逃げ出したって感じて情報どおりについた先は。

ただの空き地だった。

「ここにいるのかな？」

そつと忍び足で近づいてみる。

いた。

ここはミヨナに知らせようつと。

電話して早速きてもらつとミヨナはずかすかと空き地に入ってきて

悟夢君を引つ張り出そうとした。

ん。。。。？

何？この匂い。。。。。

くさい。

シンナー？

あわててハンカチで口を覆う。

匂いがいろいろ混ざっててはきそうだった。

そしてゆっくり誰にも気づかれないうちに逃げた。

はずだったんだけど。。。。。

おかしいな。なんでだろ。

何でこんなことになったんだろう？

「ぎゃあっ！！」

危うく床に寝てる人を蹴り飛ばして転ぶところだったけど。。。。

寝てる人を蹴りとばすまではしちやって。。。。

どおしよう!？

「いつてえなあ!!」

「あ、あ。ごめんなさいい！」

「あやまつたらなんでも。。ん？」

ドサッ!

いきなりあたしの上に振ってきた。

ギヤアアアア！？

恐くてこえもでない。けど必死で逃げようと思った。でも、逃げられない。

男の人の息遣いが荒い・・・。

イイイイイヤアアアアアア！？

怖いよつ。怖いよお！

必死であたしはもがいた。何で誰も助けしてくれないんだろう？そんなことをパニックの頭でたまに考えながら。

第8話：恐怖 & 1 t ; 悟夢 & g t ; (前書き)

タイトルは恐怖ですが、今回の悟夢君は、ただたんにやけくそです。

第8話：恐怖。 & It； 悟夢>；

アイツが来たのを感じ取った。
口をふさいでるしぐさも、何かにつまずいたしぐさも。
くそ。

薬たんねえよ。

気持ちよくなんねえ。

アイツのことも忘れちまえたら。そればかり。

すると、押し倒されている光景を見た。

助けてやろうと思った。

でも、出来ない。

俺はアイツに裏切られて。

アイツは俺をうつとうしく思ってる。

きつと、このままアイツが近づいてこようとなんか一生思わないように。

痛めつけてしまえばいいんだ。

いつそのこと。

俺のこの手で……。

そんなことをぼーっと考えていると半脱げの状態のアイツはどっかに走り去った。

ほっとしている自分が嫌になる。

ぼうっとしたままの頭で薬に手を伸ばした。

今度のはハリス。

あんま好きじゃねーけど。

もともと薬もタバコもあのクソババアを思い出すからだいつ嫌いなんだ。

すると、

ガシッ！！

俺はやわらかい何かにつかまれていた。

違う。

あいつだ。

ミヨナに抱きしめられていた。

「良かった……良かった……良かった！無事で！！」

その後ろにはひどい格好のままのアイツ……
麻緒梨が立っていた。

ああ。

なんだよ。

そーゆうことか。

お前は友達思いで、お友達のために俺を探しにきたのか。
俺が心配だったからじゃなくて。

とたんにやるせなくなつた。

もう、ミヨナを引っぺがす元気さえなくなつた。

そっか。

そーだった。

俺はただの馬鹿か。

何を勘違いしてたんだろうな。

やけくそになつてその場でミヨナを俺は。

犯した。

第8話：恐怖。 & 1 t ; 悟夢 & g t ; ; (後書き)

薬の種類はあまり知りません。薬はしたくないですね。小説はフィクションだからいいのですが、現実には違法ですよ。(笑)

第9話・あたし、ミヨナ。（前書き）

今回は少々性的なシーンが含まれますが、リアルな描写はあまりありません。体調や好みを考えて上で読むか読まないかを決めてください。

第9話：あたし、ミヨナ。

怖くなって、嫌になって逃げ出したのに。

何であたし・・・・・・・・・・また、帰ってきたんだろっ？

あたし・・・・・・・・・・あたし、変だ。

そんなことを「よかったね」そうミヨナの後ろでつぶやきながら考えてたの。

そしたら・・・・・・・・・・悟夢君と目が合って。

目を逸らしたら・・・・・・・・・・。

「あっ。」

何か変な声が聞こえて・・・・・・・・・・目をそっちに向けたら。
変なことになってた。

「う・・・・・・・・・・そ。」

腰が抜けて動けなくなって。

逃げたいのに目をそらせなくて。

その場に座ったまま二人を凝視していた。

体をくねらせていくミヨナを凝視していて。

物音が聞こえなくなって。

すべてが終わったあと。

何の記憶もなかった。

ただ、気づいたらどこかにいた。

「んあ？」

「あ、起きた・・・・・・・・・・。」

ひあっ。

「さ、悟夢君？」

「てめーシンナーや薬にまみれたところで酔ってんじゃねーよ。」

あたしに触れようとして伸ばしてくれた手をあたしは払いのけた。

「やめてっ。」

そのときの悟夢君の顔。

寂しげで、あたしはあわてて顔を逸らした。

「……ミヨナを抱いたその手で……あたしに……
触らないで……。」

泣きそうになりながら立ち上がろうとした。

でも、足にちつとも力が入らなくて。

マンガみたいにかっこよく走り去ってしまったらよかったのに。

なんて……かっこ悪い……。

「……ごめん。」

「ミヨナ……ミヨナは？」

「……置いてきた……たぶん。まだ寝てる。」

「お願い……聞いてくれる？」

「あ？」

「ミヨナを……う。っ。あ、愛してあげて？」

「……何だよ……それ。」

「ミヨナはかわいそうな子だから……それと。お願い。あたしを……大嫌いつて……言つて？」

「……友達思いたな。」

「はじめてあつた時とか、ほんとはただの体だけ狙つてたつて言つて？全部、嘘だつて言つてよ。」

「……嫌いだ。大っ嫌いだ！！友達がよければ自分はどうでもいいつて？ふざけんな！！」

そう言つて、悟夢君は走り去つてた。

だつて。

だつてじゃあ。

あたしはどうすればいいの？

わかんないの。

わかんないんだよ？

ミヨナにはもう失敗してほしくない。

ミヨナにはずっと笑つてほしい。

なのに、自分のこと最優先になんて出来ない。

あたしは。

悟夢君が好きなの。

すきって思っちゃいけないの。

だから。

会いたくなかった。

会ったら。

こんな風に気持ち揺らいでしまつてわかつていたから……

第9話：あたし、ミヨナ。（後書き）

新型インフルエンザが日本にもはやりだしましたね。皆さん健康には気をつけましょう（笑）。ここまで読んでくれた方々、ありがとうございます。良ければお楽しみに。

第9話・俺、ミヨナ。(前書き)

だんだん二人はミヨナがいることが辛くなってきて、自分がどうしたらいいのかわからなくなってきました。

第9話：俺、ミヨナ。

「お願い……あたしをだいつ嫌いだって言ってる？
麻緒莉の声が耳に焼き付いて離れない。」

つまりは……俺をあきらめようとしている？

駄目だ。

なんでこう都合よくとるんだろうか。

俺は。

やけくそになってミヨナを抱いたこと。

ちっとも感覚がなかった。

気が付いたら寝てるミヨナと、薬の部屋の空気に汚染された半分意識の無い麻緒莉だけがあった。

もしも、素直にいえるなら。

俺はいえるんだろうか。

ミヨナとは縁を切って、麻緒莉が好きだと。

でも、そんなことをすればミヨナが黙ってるはずも無い。

なあ。

この気持ち、いえそうにもねえから。

ひとつだけ聞くよ。

俺とお前は会っっちゃいけない人物だったのか？

ミヨナはしつこい女。

でも、麻緒莉からしたら大事で大切な友達なわけだ。

俺はおかしいのか？

アイツにこだわる必要はどこにも無い。

まるで……初恋でも見つけたかのようなしつこさじゃないか。

気が付いたら外に飛び出してきて、家の前に居た。

しかも親父がいるほうの。

入る気にもならねえ。

どうせ俺は無関心。

どうせアイツは仕事。

何で………こんなところに生まれてこなきゃならなかったんだろう。

世界なんてやつぱりみんな腐ってるんだ。

一人立ってみた。

みんな無関心そうに俺を通り過ぎていく。

世界でお前はひとりぼっちなんだよ。

そう言われてる気がしてムシヤクシヤしてくる。

聞こえる路上の音楽に足を止めるやつらはいない。

光は多いのに。

うるさいくらいなのに。

いろんな匂いも混じってるのに。

結局みんな孤独なんだよ。

音楽だろうがなんだろうが関係ねえ。

だれも、ためーに興味なんかしめしちやくれねーんだ。

夢？

はっ。

んなもんねーし。

大体な、現実みるよ。

夢なんか追いかけて成功したやつがいったいどれほどいる？

ほんの一握りだ。

だいたいそれもこの汚れ切った世界を見て幻滅すんだ。

それがおちで、

それが世界ってゆーんだろうが。

第10話：安心。

数日後。

あたしはミヨナの横で偽りの笑顔を作ってた。

あの日から。

もう、悟夢君には会ってないない。

そして、あたしは彼氏とも別れちゃって、彼氏募集中ってわけ。だけど、前みたいを探しに行く気にもなれないの。

恋なんてしたくない。

忘れてしまいたい。

頭に回るのはそんな言葉ばかり。

今まで………こんなこと無かったのに………。

失恋しても、めげずに次に進んでいくのがあたし流。

だったのに………。

忘れない。

あんな軽い男、嫌いだ。

叫びたい。

あんな男、だいつ嫌いだ。

なのに、何も出来ない。

駅に行くとき悟夢君の姿を探してる自分が嫌で仕方ない。

これはきつと、悟夢君なりのさよならなんだ。

だからあたしは忘れなくちゃ。

今すぐ次へ向かわなきゃ。

めげてる暇なんてないんだよ。

本当の愛や恋なんて知らない。

知りたくも無い。

知らなくていい。

今は、知ること自体、触れること自体、すべてが怖い。でも、生まれてくるこの気持ちって何なんだろう。

そろそろ別の男に目がいったっていいころなのに。
おかしいな。

うん。

おかしいよ。

それに何でか熱っぽい。

最近いるんなことがあったからかな……。

「マオ。どうしたの？熱？」

「ヨミ……うん。なんか熱っぽいや。」

あははっと笑ってみる。

最近あんまりミヨナともはなさなくなってたからヨミともなんとなく話してなかった。

すごく……久しぶりな感じ。

「ミヨナとも喧嘩してるんでしょ？」

「え？」

「はたからみればまるわかりよ。あっちはベロンベロンだし。こっちはドヨオンとしてるし。」

「そんな分かりやすかった？」

「うん。ものすんごく。」

「あっはは。ごめ〜ん。」

「ほら、また無理して笑う。マオ気づいてる？無理して笑うときいっつも歯茎を見せて笑うこと。そーゆうのやめたほうがいいよ。」

「うん。そうだね……ありがとー……。」

ヨミと話して一気に緊張に似た糸が途切れたように泣いてしまった。

ヨミは何も言わずにそばにいてくれた。

それだけだったのに、ただそれだけがとてつもなく嬉しくて。

自分がどれだけちっちゃかったのかを思い知らされた。

第10話：安心。

もう今の自分には分からない。

何が現実で何が非現実なんだろう。

俺はただ居場所がほしい。

それだけのはずなのに、えり好みをするようになりだした。
最近じゃ、コンビにや、あのカフェにふらりとよる。

そこにもしかしたら自分の居場所があるかもしれないって。
もしかしたらあいつがいるかもしれないって。

本格的にやばいな……俺。

この前、見かけたんだ。

あいつを。

悲しそうな顔で見つめてたのは俺たちが話してた場所。

普通に話しかければいいのに、それが出来なくて。

話しかけようとするたびに『触らないで!!』あの言葉が頭に反響する。

最近じゃどこいってもアイツの悲しそうな顔が目に見えついて、現れる。

てめーは生霊か。

そう言ってみたいけど。

こいつを呼び出してるのは……。

こいつを呼び寄せてるのは……。

俺だ……。

「……ハッ……なっさけねーなあ。俺……」

何をしても、何もしなくても。

おかしいくらい探してて。

執着しすぎだつて。

いい加減他にめえやれよ。

女なんて腐るほどいる。

中には本当に腐った奴もいる。

だけど、あいつの声ばかりが耳に残る。

『触らないで!!』

わかつたつて。

もう近寄りもしねえから。

『触らないで!!』

わかつたつて。

ほんとマジ。

『それから……あたしを……だいつ嫌いだつて言
つて?』

それでおまえが幸せになるならいつてやるぞ。

何度だつて。

嫌いだ。

だいつ嫌いだ。

『悟夢君。』

なんだよ。

『悟夢君!』

本格的におかしいんだ俺。

少しほつといてくれないか?

『悟夢君?』

ああ。

ほんとにもー。

『悟夢君……』

馬鹿だよ。

俺は……。

……?

今、目の前に立ってる麻緒莉は。

バーチャルか?

おかしい。

この駅はもう使わなくなってるくらいの勢いで来なくなった駅のはずだ。

ってゆうか、俺……………。

なんで駅なんかに？

「……………今更……………裏切るなんて。できないよね。」

「……………おいま……………」

『触らないで!!』

なさけねえなあ。

またかよ。

「……………今更……………ほんとは……………悟夢君が好きななんて。いえないよ。」

は？

今なんて？

『触らないで!!』

しらねーよ。

んなのしらねーよ。

「誰がすきだつて？」

すると麻緒莉は顔を上げた。

そして、顔を真っ赤にしてそむけた。

「なんでもない。」

「なんでもなくねーだろ。人の名前出しといて。」

ああ。

やっと分かった。

俺にとって一番落ち着ける奴がこいつなんだ。

こいつじゃなきゃいけないんだ。

こいつの顔を見たたん安心するなんて……………。

第11話：実り恋。

なんだろう・・・。。。

最近あたしおかしいの。

雨の日もかまわず気づけば悟夢君と会った場所にいる。

そして気づけばいつも同じことをつぶやいてる。

今更とか。

あきらめたはずなのにまだすきとか。

新しい恋が出来ない。

新しい恋が見つからない。

「何がなんでもないって？」

なのに。

なんであたしはここにいて、悟夢君もここにいるの？

どうして正面向かい合って話してるの？

あたしはミヨナを裏切れない。

そっだよ。

「あたしは、ミヨナを裏切ることにはできない。」

「俺は出来る。」

「そんなことしないで！！おねがい。」

「もともと俺は裏切りじゃない。アイツのことなんかなんとも思っ
てないんだから。」

「聞きたくない。いや。やめて。」

「俺が好きなのは誰だか教えてやるうか？」

「ミヨナよ。ミヨナ。そう言って。」

「もういいよ。」

唐突に聞こえた声に思わず顔を上げる。

「ミヨナ・・・。。。」

「あたし、ほんとには知ってた。悟夢はあたしなんかどうでもいいこ
と。麻緒莉がありえないくらい悟夢を引きずってること。それを知

つって横目であんた見てて、悟夢を自分のそばに縛り付けておくことで優越感に浸ってたの。いつつもうらやましいのよ。もてるのはあんたばかり。だから一人くらい我慢してよ。なんで悟夢なの！？あんたは敵よ。あたしの敵。仲間でも友達なんかでもなんでもない。だから、あんたに隙ができたら絶対今度こそ奪ってやるわ。」

「ミヨナ。そんな風につつとうしく思ってたの………?」

「顔も見たくない。殴ってしまいそう。はやく行ってよ。消えて。」

「ひどい………。」

そうしてあたしは走り去った。

そのあとを追ってきてくれた悟夢君だったけど。

ミヨナがあのと何を言っているのかなんて知らなかった。知るはずなかったの。

「ひどいのはどっちよ………あんたは慰めてもらえる相手がいるじゃない。でも、あたしはいつもこう。あんたが悲劇のヒロインやってヒーローに慰めてもらってる間、あたしは悪役をして嫌われて。一人で泣いてることも気づかれずにあんたは相手となくよくやってんのよ………。あんたのがよっぽどひどいじゃない。」

そんなことも知らずにあたしは悟夢君との恋を实らせた。

犠牲を払って………。

第11話：実り恋。（後書き）

これからまだまだまだいろいろなことがありますよ。

（の予定。

それでも二人は確かな運命のいとつながれてるでしょうか・・・

・・・？

（バットエンドか、ハッピーエンドかどちらにしようか迷ってる最中です。

ちなみにしようもないことかもしれませんが、この小説を読んでくださる人のアクセス数ですね！！

アクセス数が1・700人突破しました！！

宣伝を口頭で2〜3人にしかしてなくても1000いってくれるんですね・・・。。。。すっごい嬉しいです！！

読んでくれた読者のみなさま、本当にありがとうございました！！

感謝感謝です（アクセス数それでもすくなくすぎるかもしれないませんが。

第12話：記憶喪失

二人がむすばれたことにまだ信じられないという時期はあっというまに過ぎて。

ミヨナとのギクシャクも減ってきたころ。

俺はある日、デートの約束を麻緒莉と約束をしていた。

それは思った以上に楽しくて、時間を忘れて二人で騒いでいた。そんなときだった。

「あ、もうこんな遅い時間。もうかえろっか。」

そういつて俺から離れていく麻緒莉の後ろから車がきていることが分かった。

「おい。後ろ車きてるからな。気をつけないと引かれるぞ。」

「あ、ホントだ。」

そういつてよけようとしたとたん、

「わっ！」

そういつて麻緒莉はよろけて道路に座り込んだ。

「あ………ヒールが折れちゃ………」

もう車は麻緒莉の数センチ前にきていて、俺は何をしたのかその後覚えていない。

ただ、ものすごい痛みと音がして。

何もかもが吹っ飛んだ気がした。

うるさい騒音と、白やしみ、クリーム色で出来た世界。

気づけばそんな場所に俺は横たわっていた。

「悟夢!!!」

俺の手を握りながら目の下に隈をつくって涙を流してる女。

え？

誰？

マジであんた誰だよ？

「誰・・・・・・・・・・？」

「え・・・・・・・・・・？」

「瞬困惑してすぐ悲しそうな顔に戻った。

「あたしのこと、わからない？」

「・・・・・・・・・・ごめん。」

「あなたは誰ですか？」

「・・・・・・・・・・誰？俺？分からない。」

「そっいえば俺、何？」

「名前は分かる？」

「・・・・・・・・・・分からない。」

分かるのは小さい頃に最低な過去を送っていたこと。

そして、ココ最近楽しかったという感覚。

「あなたの名前はね・・・・・・・・・・悟夢っていうんだよ。上の名前はよく分かってないんだけど。」

「サトム・・・・・・・・・・？」

「そう、悟るに夢って書いて悟夢。」

「・・・・・・・・・・ごめん、何もわかんねえや。」

「そっか。じゃあまたね。また遊びに来るから。あたしは麻緒莉、次までには覚えておいてね。」

「・・・・・・・・・・あ。ああ・・・・・・・・・・。」

俺は、彼女に悲しい思いをさせたのだろうか・・・・・・・・・・。

第12話：記憶喪失（後書き）

これからもミヨナは登場しますので、ミヨナにご注目
もしかしたら一番皆さん嫌う役かもしれないんですけど・・・
作者的には感情を素直にだせる子ってことで結構好きだったりしま
す。

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。

第13話：ミヨナ再び

その後、何度も病院に通ったけど、悟夢は何も思い出してはくれなかった。

そんなとき、ミヨナが動き出してるなんて思いもしなかった。

あたしは自分のことで頭がいっぱいになってたのかもしれないね。ミヨナだって、辛かったのに、あの日1人で逃げ出して。

応援するっていつときながら結局自分ひとりが幸せをつかんだ。

ねえ？あの日、もしかしてミヨナはないてたの？

今でもたまに憂鬱そうに空を見上げるよね。

前みたいに仲良くは戻れない？

当然か……当然だよ。

仲良くなんかしたくないよね……。

あたしがミヨナから奪っちゃったんだもんね？

でもね、あたし、今でも思うの。

あの頃の友情は偽者なんかじゃなかったよね？

あたしたち、ちゃんと親友だったよね？

それから記憶は一向に戻らないまましばらくの月日がたって、気づけば病院にはミヨナがいるようになった。

あたしの顔をみるとすぐどっかへ行っちゃうけど。

誰かのお見舞いかな？

悟夢のかな？

まあ、おみまいくらいするよね……。

それくらいするよ……。

うん。きつと。

だから……。

なのに、何？この胸騒ぎ。

あたしってこんなドス黒い子だったの？

どうして信じられないの？

怖くて聞き出せない。

悟夢から………。

ミヨナ、何しに来てたの？なんて。

悟夢に嫌な子だって、簡単に人を疑う子だって思われたくない。
嫌われるのが怖いよ………。

だって、人間なんか過去がなければ、信じられるものがないんだから。

きっと、すぐ縁なんて切れちゃうよね………。

そう思いながらも病院の窓の前に立って、ドアを開ける。

「おお。まあ。」

悟夢はあたしの顔を記憶が失われた後、すぐ覚えてくれて、あたしをマオと呼ぶようになった。

違うよ。

あたしの名前はマオリ。

あなたがよく呼んでくれた名前だよ？

どうして、何も思い出してくれないの？

でも、攻めたって何にもなんないよね。

「えへ。また来ちゃった。」

そういつて、手に持ってた桃を持ち上げた。

「おお！桃だ。」

「あれ？好き？」

「ん、まあ。」

へえ、あたし、彼女なのに知らなかったなあ………。

でも、この場合、彼女だった、って言うのかな？

「じゃあ剥いてあげるよ。」

「なあ、なんでまおは俺んとこきてくれんの？」

「え？何でつて……助けられたからだよ。」

「誰に？」

「悟夢に。」

「俺が？」

「そうだよ。」

「なんで？」

「一緒にいたから。」

「彼女でもないのに？」

どつくん……。

「え？」

「彼女じゃないんでしょ？」

「なんでそう思うの？」

「だって、今日彼女っていつうやつが来た。」

「だ……れ……？」

のどがかすれる。目の前が白くなる。

いや……どうしよう。

「え？まおと同じ学校でしょ？同じ制服きてたよ。」

「まさか……ミヨナ……？」

「そうそう。そんな名前だった。」

「悟夢は……ミヨナが……好きなの？」

「俺？俺はまだ良くわかんないよ。だいたい今日言われたばっかだ

し、自覚ないつつうか。」

「そう。」

目の前が、真つ暗だ……。

ミヨナはまだ……あきらめてなんかいなかった。

数センチ先には君がいるのに。

手が届かない……。

彼女だったことは真実だ。

けど、今の彼女は？

あたしじゃないの？

だって、記憶ないんだもんね。

だった。だよね。

あたしも。

「まお？顔色悪いよ？」

「あたしは……あたしはまおじゃなくてマオリだよ……」

「……ごめんね、今日はもう、ちょっと、帰らせて……」

落ち着け。

落ち着くん。

「え？ああまたね。」

打ち明けてしまえばいいの？

でも、彼女だったからってまた無理やり付き合うなんていやだって思った。

なのに、ミヨナはそうじゃないの？

彼女だったからまた彼女だって思わせて、付き合ってたんだからって、責任取らせるようにつき合いたいのか？

感情がない付き合いなんて悲しいことくらい分かってるでしょ？
ううん。

ミヨナ、あなたが誰よりも知ってるでしょ？

なのに記憶消えたらまたリセットしてセットしなおすように簡単に思い込みに責任を取らせるように近づくの？

このごろずっと空を見上げてたのはどうして？

このごろ病院で見かけるようになったのはどうして？

もう、何がなんだかわかんない……。

第13話・ミヨナ再び（後書き）

いやあ、こんな小説でも呼んでくださる方はいらっしやるんですね
え。。。。。。。

ありがとうございます。

感謝しなければね。。。。。。読者様は書き手にとってありがたい
ものですからね。。。。。。。

第14話：ミヨナから見たもの（前書き）

今回は性的シーンが多く見られますので嫌いな方、想像するだけでも気分が悪くなる方は見ないで下さい。

体調が優れていないのに、ここを読んでさらに具合が悪くなったとしても、作者は一切の責任を負えません。

ご了承下さい。

第14話：ミヨナから見たもの

あたしはあの時言った。

『隙さえあれば悟夢を狙う』と。

まさかこんなに早くチャンスが来るなんておもっても見なかった。しかも、悟夢は記憶をうしなっていて、アイツも自分が彼女だったことを悟夢にいつてない。

こんなチャンス、めったにないわ。

そうでしょう？

だから今日言っちゃったのよ。

あたしは悟夢の彼女だったんだよって。

嘘は言っていないわ。

だから、『もう一回付き合おう？』って。

馬鹿みたい。

なんで真実を告げないのかしら。

隙なんかみせるから。

見せるほうが悪いのよ。

だから今日も占領してやるわ。

じわじわと……。

あの頃の悟夢はアイツばかりであたしを見てもくれなかった。

何でアイツなの？

そばにいるのはあたしじゃないの？

なんでアイツばかり。

アイツがいると男に声かけられやすくなったから、だから一緒にいた。

今までを変えられる気がした。

アイツもいつも違う彼氏がいた。

アイツはもてる。

心底にくい。

カラダで落としてるんじゃないかといつも疑ってたわ。

あいつがもてる理由を聞き出して、自分が変わってやるうと一緒にいただけなのに、親友ですって？

はっ。笑っちゃうわ。

悟夢を取ってつたあの日もそうだった。

ミヨナ、ミヨナ、あたしの名前ばかり出して。

自分はいいい子ぶってあたしは悪役？

ああそうかよあたしはあんたの引き立てやくじゃねえよ。

そうおもってもうしゃべってやらないことに決めたの。

ヨミだつて、あたし別に友達だなんて思つてない。

ただ1人でかわいそうだったし、あたしのいい引き立て役になると思つたから一緒にいたのにあの堅物。

合コンにさえいこうとしないんだから。

ああ、空は晴天ね。

空を見ると憂鬱になる。

あいつが好きだといつかこぼしていたから。

空なんてどうでもいいじゃない。

どこまで無駄なところに目向けてるわけ？

そんなんだからとられんのよ。

大事なものも、全部。

本当はあいつの両親や家族だつてうらんでやりたい。

けどあたしはそこまで汚くないからやめておく。

それにあいつの口から両親の話も家族の話もあんまり聞かないし。

どうせ仲でも悪いんだらう。

家でのけものにされてるあいつを想像するとワクワクしちゃう。

ザマーミロってね。

だから今までされてきた数々のことをフィクションをくわえて今日は悟夢に話にきたわ。

嫌われてしまえ。

全ての大事なものから。

ガラガラガラ

「こんにちは。悟夢君、ミヨナだよ。覚えてるかな？」

精一杯の可愛くて、素直な子を演じてみる。

「ああ、俺の彼女って人。」

「ひどいなあ、だからまた付き合おうよ。記憶がなくなったら、彼女には変わりないでしょ？」

「まあ、うん。そうかもしれないけど、多分俺、君の事傷つけるよ。」

「なんで？」

「記憶がないから……今までどおりには行かないと思うし、いろいろ忘れてるから、きつと悲しめると思う。」

馬鹿ね。記憶がないからいいんじゃない。

「そんなことないよお。あたしはずっと悟夢君が好きだよ？」

悟夢を抱きしめる。

「でも、まおは傷ついてた。少なくとも俺の記憶がなかったせいで。」

「アイツの名を口にするな！」

「あのねえ？あいつはあ、あたしたちを引き剥がそうとした奴なんだよお？悟夢にはあたしがいるのに、あいつが割って入ってこようとしたの。ひどいでしょ？だから記憶がなくなったらって聞いても毎日お見舞いに来るでしょお？」

「そんなひどい奴には見えないけどな。」

「そんなにあたしの言ってること信じられない？」

「いや、その、そうゆうわけじゃ、ねえんだけどさ。いい子だし。」

「それはあ、アイツの演技だよ。いい子そんな無害そんな顔して近づいてきてじわじわと人のものに手を付けて奪おうって言う。」

「ひど……。」

「でしょお？あたしたちも何度も危ない目にあっただよお？それ

なのに悟夢はあたしを信じないで何も言ってこないあいつを信じるのお？」

「いや、べつに。それよりさ、苦しいんだけど。」

「へ？」

「胸で息ができねえ……みたいな？」

「やあんえつち！」

「えつち……つて。」

ぱっとはなす。

「またくるからあ、そのときまでにちゃんと答え聞かせてねえ？」

そして、その日、アイツは悟夢のところを訪れなかったらしい。

翌日にあたしはそのことを知ることになる。

ガラガラガラ。

「さつとむう！」

今にも抱きつかん勢いで悟夢のそばに駆け寄る。

「こたえはあ？考えといてくれたあ？」

「あ、まあ、別にいいよ。」

「彼女、継続……？」

「君がそれでいいなら。」

「君じゃなくて、ミヨナ！彼女なんだから覚えておいてよね？」

そういつて、悟夢個室のベッドの上に乗る、カーテンを引くと、窓という窓を閉めた。

「なにすんだよ？」

「なにつてえ、そりやお着替えだよあ？」

悟夢が着ているパジャマらしきもののボタンを一つ一つはずしていく。

「ちょ！やめろつて。」

「彼女なのにな？」

そういつて、キスをすると荒い息遣いが聞こえ始めた。
悟夢の胸に顔をうずめる。
ビクン。

悟夢のカラダが反応する。
今、悟夢はあたしに感じている。
アイツでも誰でもない。

あたしに！
悟夢の手は素早くあたしの制服を脱がせると、スカートの中に進入してきた。

「あっ！」
思わず声があがる。

「静かに、誰か来ちゃうだろ。」
「病人の癖にい。」

そしてあたしが素っ裸になって、悟夢と同じシーツの下に滑り込んだ頃、その“誰か”はやってきた。

「悟夢・・・・・・・・・・と・・・・・・・・・・ミヨナ・・・・・・・・・・？」
「まお？」

悟夢が目を見開く。
すぐにカーテンは引かれ、出て行った音が聞こえる。

「悟夢う？どうしたの？続きやろうよ。」
「・・・・・・・・・・ごめん、今日はもう無理。」
「つち・・・・・・・・・・。」

失敗したか。

第14話・ミヨナから見たもの（後書き）

今回はミヨナSideでしたがいかがでしょうか。

ちょっと一つの見方しかしてない割には長かったかもしれませんね。

第15話：悟夢から見たもの

ミヨナという女が俺のところに来て、自分は彼女だと言い張った。ならなんでもそこにいたのが、俺の目に入ってきたのがまおだったのか。

今の俺にはわからない。

でも、ミヨナは無害そうな顔して近づいてきてじわじわと人のものに手を付けて奪おうとするといっていた。

でも、ミヨナみたいにアイツは積極的じゃなかったはずだ。

『彼女なのに？』

ミヨナの声が邪魔する。

そうして、半分くらい意識が吹っ飛んで、気づけばミヨナって女がベッドの上において、マオがすっごい傷ついたみたいなおおしてそこに立っていた。

何がどうなってんだよ？

ミヨナにはとりあえず帰ってもらおう。

ミヨナって女の話は信じられるか？

全てが全て信じられるわけじゃない。

でも、俺はミヨナに彼女だっていわれたことをまおには話した。

そのときになんでまおは自分が彼女だといわなかった？

いや、これまでもという機会は何度もあったはずだ。

なんで何も言わない？

おまえはどこ誰なんだよ？

ミヨナは何者なんだよ？

俺たちはどう関係で繋がってるんだよ？

どうして彼女でもないのに毎日お見舞いに来てくれるんだ？

やっぱりミヨナが言ったことが本当だからか？

そしてどうして彼女なのに毎日ではなくここ最近になってひょっこり顔出すんだ？

彼女だったら一番最初に見るものじゃないか？

いや。ちがうな。医者かナースか。

いや、その前に俺、両親は？

この金は？

誰かが払ってるはずなんだ。

俺にはなんも言ってこないんだから。

わかんねえよ……全部わけわけんねえ……。

俺、今どんな顔してる？

鏡で自分の顔を見る。

情けねえかお。お前、誰よ？

本当に俺か？

しかもボタン直したつもりで掛け間違えてるじゃないか。

なあ……だれか教えてくれよ。

俺はどこの何で何者なんだ？

第15話：悟夢から見たもの（後書き）

今回の作品は短かったですね……………。
次回、麻緒梨Sideで書きたいと思っています。

ただ、この小説、なんで続けているんでしょう……………作者的にもなぞです。一度やめようとも思ったんです。

読者様があまりにも少なく……………。

ですが、見てみれば、アクセス数2000言ってるんですね……………
・しよつちゆう投稿している記憶という小説よりアクセス数多いんです……………。ユニークアクセスも、記憶より多く、792人いるんです。

なぞです。

不思議です。何でしょう……………。

以外に面白かったりするのかも……………。
それとも読者の皆様が優しいのでしょうか……………。

どちらにしろ、読者様がいるというのはそれだけでがんばろうと思えます。ありがとうございます。

第16話：麻緒梨が目にしたもの

『昨日は行かなくてごめんね。』

そういつて今日は悟夢に会いに行こうと思ったの。

なのに、なにこの状況………？

なんでミヨナが裸で、その上に半裸の悟夢が乗ってるの？

え？

部屋間違えた？

え？

何がどうなってんの？

わかんない。

どうして？

一瞬で景色が吹っ飛んで、何も見えなくなつて、目がくらんだ。

あわててカーテンを引いて扉を閉めた。

しばらく走り去って病院の出口まで出ると腰が抜けてその場に座り

込んでしまった。

あれは………間違いない。

一瞬だったけど。

ミヨナと悟夢だった。

ミヨナはいつたい何がしたいの？

何でそこまでして奪いたいなの？

なんで………。

悟夢には………あたしがいるんじゃないの………？

記憶がないから、絆もなくなるの？

好きな人を奪いたいから絆もなくなるの？

ああ………そつかあ………。

人間の絆なんてさいっしょからもろかつたんだよね。

考えてみれば絆も記憶も過去のものだもんね？

馬鹿みたい………。

はは。

不確かなものにすぎりつきたくないから悟夢に自分が彼女だったということを言わずにいたけど。

違うんだ……あたしが一番過去を必要としてたんだ。

誰より一番必要としてたんだ……。

ふらりと立ち上がって泣きそうになりながらなかないように空を見上げた。

「せいでんだあ……。」

こういう時って……普通雨降るもんじゃない？

「ムードないっ！」

そう1人でいつてることが何よりむなしくて。

ああ……あたしって、こんなに悟夢のこと好きだったんだ

なあ……。

そう思ったらとたんに笑顔もなくなってしまった。

あたし……馬鹿だね。

しばらく、悟夢のところにもミヨナのところにもいけないや……。

第16話：麻緒梨が目にしたもの（後書き）

やう・・・・・・・・どうつなげていこうかなあ・・・・・・・・難しいです。

なんかマンガかいてる気分・・・・・・・・。
読んでくれてありがとうございました。

第17話：どうでもいい

信じられないくらい時は流れて。

でも、確かめたくて。

あたしは悟夢のいる病棟へ足を運んだ。

ねえ………嘘って。

嫌なことって、すぐ信じてもらえるのに。
どうして真実はなかなか伝わらないの？

ねえ………悟夢………。

あたしは悟夢とであって、一緒にいて、楽しくて。
苦しくて、幸せだった。

その記憶のすべてが………あたしを生かす術だった。
なのになんで貴方は今。

あたしに向かつて威嚇しているの？

貴方は何であたしに出て行けと睨みつけるの？

どうしてあたしがいた場所にはミヨナがいて、勝利の笑みのような
ものを浮かべているの？

………どうして。

「どうして………。」

外は曇り空。

ミヨナはあたしが邪魔だった。

邪魔で仕方なかった。

だから邪魔者を排除した。

あたしはミヨナに……排除された。

真実を隠したまま、嘘にくるまれた悟夢はミヨナの言うことを信じた。

ミヨナはそれほどまでにあたしが……。

あたしが邪魔だった。

友達なんかじゃ……なかった。

トモダチナンカジャ
ナカッタ……。

隣で笑いあっていた日々も……偽者だった……？
全部、作り物だった？

あたしはね……ミヨナといた時間、楽しかった。
嬉しかった。

みんな彼氏が次々に変わっていくあたしをヤリマン女と言って近づいてこようとしたのに、ミヨナは違った。

ヨミまであたしに紹介してくれて。

嬉しかった。

女友達に縁がなかったから。

家族のことも全部忘れられるくらい。

楽しかった。

それなのに……。

空を見上げた。

灰色でどんより曇っている。

雨は降りそうではない。

けど、あたしと同じ……輝きを失った色。

いっそ雨が降ってくれとも願う。

あたしの過去を洗い流してくれ……………とも。

あれ？

あたし、いつ病室出たんだろう。

まあいいやあ。

まあ……………いいやあ……………。

なんか、ホント……………。

どうでもいいや……………。

第17話：どうでもいい（後書き）

失われた記憶、新たにすりかえられた記憶。

大切なものから睨まれ、邪魔と言われたとき。

そのときに生まれた感情はいつ悲しみから憎しみへと移るのだろうか。

それとも、その感情をばねに新たな感情を生み出すのか？

そんなこんなですが、呼んでくださった皆様に感謝します。

ありがとうございます。

第18話：好きでした。

好きでした……………。

好きでした。

それでいいんでしょう？

そうすればいいんでしょう？

あたしはいつもの生活に戻るだけ。

また彼氏をあさる日々に戻るだけ。

合コンに顔を出してみたり、いろんなことをしていると時間は過ぎる。

でも、なに？

キス以上にいけないこのもやもや感……………。

いやなの。

この人じゃない。

この人じゃないや。

なんで？

どうして？

誰だっていいじゃない。

あたしは片思いなんて耐えられない。

いままで耐えてきたのが不思議なくらい。

このまま誰も遊び相手がいなくなるなんていや……………。

いや……………。

一人なんて絶対いや。

あたしに言い寄ってくるヤツは沢山いる。

でもいや……………。

みんなあたしのカラダ目当てなんでしょ!？

あれ……でも、悟夢もこれっぽちもそんな気持ちなかった
って言える？

いえない。

でもあの日、それだけが頭のヤツじゃないって。

嬉しかった。

嬉しかった……？

悟夢……？

関係ない。

関係ないじゃない。

ミヨナの彼氏なんて。

あたしのこと何にも覚えてないんだから。

冗談じゃない。

冗談じゃ……ない。

でも何？

好き。

好き……。

好き……。

もう、気持ちが……とめられない。

どうしたらいいの？

そう……。

あたしは……誰が好きなの？

好きな相手は誰……？

悟夢……。

悟夢。

さとむ。

あいたいよ。

あいたいの。

どうしてよ。

どうして？

あたしは………悟夢に嫌われてしまってもなお。

嫌われた相手を好きなんて………おかしい。

おかしすぎるよ。

どうかしてるよ………私………。

今日も来るはずのない連絡を待って携帯を握る。

二度と表示されることのない悟夢のその名を待ち続けて。

第19話：戻った記憶。

分からない……分からないんだ。

何もかも。

でも、気がつけば俺はマオを睨んでいて。

それ以来マオも俺のところに来なくなつた。

毎日のようにミヨナが俺のところに来て。

マオの悪口を言っていく。

ミヨナの言うことは全部本当なのか？

すべてが遮断された俺にとって、外から入ってくる情報はミヨナから与えられたものしかなかった。

退院した。

誰かが喜んでくれる気がした。

でも、ミヨナ以外、誰もいない。

家族もあいにこない。

何故かは入院中思い出したから分かった。

でも、重要なことが思い出せてない。

分からないんだ。

マオが頭からはなれようとしない。

ミヨナみたいにべったりと俺の脳裏にくっついたまんまだ。

ミヨナは相当俺に惚れているらしくべったりしてくる。

かなりうざい……。

いや……うざいなんて思っちゃ駄目だ。

彼女だったし、彼女……なんだから。

会いたい。

マオに。

すべてを聞きたい。

俺のことを知ってる限りですべてのことを。

聞きたいんだ。

なんで俺の見舞いなんかきてくれた？

本当は俺、お前のほうが彼女なんじゃって気がしてならないんだ。

でも、今さらだよな。

おせえよな。

時はあっという間に過ぎる。

もやもや感は募るばかり。

ぱっと顔を上げると、ぱっと顔を逸らした少女がいた。

「……マオ？」

マオはびくりと体をこわばらせると反対通行のほうへ逃げた。

「まって！まお！！まてよ！！！」

そこにトラックが来ていた。

悪いのは完璧に俺だ。

マオが後ろを振り返った。

「……だめっ！こないで！！！」

次の瞬間……。

キキイイイイイイイイ！！！！

グシヤ…………。

ドサドサドサ…………。

二人して弾き飛ばされた。

俺は壁に頭を強くぶつけて、マオは…………トラックの下にいたと思う。

そのまま意識がとんだ。

ここ、どこだろうか。

俺、マオに聞きたいことあったのに。

きけないままってことか？

でも、なんだろう。

次々に浮かんでくるこの映像・・・・・・・・。

まおが笑って。

カフェにいて。

学校サボって。

遊園地にいて。

ミヨナが邪魔して。

薬やって。

マオに嫌われて。

でも、付き合えて。

悲しい。

恋しい。

愛しい。

すべて混ざって、涙になる。

マオ・・・・・・・・ごめん。

やっぱマオが彼女だったんだな。

マオ……ごめん。

いや、正式名、如月麻緒梨。

好きだ……。

やっぱり俺、記憶がなくても、お前のことが頭から離れなかった。

お前が好きだよ。

麻緒梨……。

でももう、死んじゃったからこの気持ちも伝えられないな。

ガクンと体が揺れる。

みぞおちパンチをくらった気分だ。

いてえ……。

とたんに目は覚めた。

頭をぐるぐる巻きにして、ミヨナが目の前にいた。

「悟夢!!」

「触るな。」

「え？」

「俺に触るな。大嘘つきめ。」

「もど……ったの？」

「全部戻った。麻緒梨はどこだ。」

「いかせない。」

「は？」

「アイツの元へなんか絶対いかせない!!」

俺の前で両手を広げた。

ミヨナは俺を睨みつけながら泣いていた。

第20話：独り

悔しい。

何で気づくの？

どこにいても見つけてしまう。

悟夢あなたのこと

.....

あなたがあたしに気づいて。

あたしの足は勝手にあなたから逃げていた。

記憶がないんでしょ？

ならどうしてあたしを追いかけるの？

どうしてあたしは逃げるの？

逃げてる間、ちらりと目に入ったトラック。

まさか.....

でも.....

駄目っ！こないで！！

気がついたら飛び出してた。

気がついたら助けてた。

気がついたらどこか分からない場所にて。

あたしは意識を失って冥界の国にいるのだと不思議と受け入れることが出来た。

悔しい。

睨まれても。

ミヨナにだまされてても。

記憶がなくても。

こんなに………。

こんなに………。

あなたのことが好きなんて。

悔しい。

悔しい。

悔しい。

忘れたいのに。

消し去りたいのに。

嫌いになりたいのに。

どんどん好きになるなんて。

悔しい。

どうしてあたしの体は………心はいつの間にかこんなにも丸となって悟夢を求めるようになってしまったの？

同じ境遇だったから？

そうかもしれない。

かわいそうだと思ったから？

そうかもしれない。

ときめいたから？

そうかもしれない。

癖やしぐさが全部、かわいいと思ったから？

そうかもしれない。

愛しいと思ったから？

そうかもしれない。

だって、それ全部で彼なんだから。

一つでもかけてたら彼じゃないんだから。

悔しいよ。

あたし………いまだにこんなにあなたのこと、好きです。

大好きです。

忘れることなんて出来ない………！
あなたじゃないと嫌なんです。

どうかだからもう、いいよね？

どうせ、あたしがいなくなっても、こんなに苦しい思いを………
・するなら。

記憶も、カラダも、なくなっても………いいよね？

大好きなお父さん。

お母さん。

そこにいるのがそうね？

二人ね？

今、行きます。

今、あいに逝くからね。

おもむろに歩いてすぐに足を止めた。

どうして………どうして二人はそんなに寂しそうに笑うの？
知ってるでしょ？

私、二人がいなくなっちゃったから、すっごく、すっごく苦しかったんだよ？

家族って呼べる人全部、失っちゃったんだよ？

今も、存在できるあたしの居場所なんて、なくなっちゃったんだよ？
おばあちゃんやおじいちゃんも現れ、みんなは笑いながらどこかに消えていく。

まっつて！まっつて！！

あたしは転んで、そのままみんなの姿は消えて、わけの分からないところに一人、取り残されてしまった。

また、独り………。

第21話：自分だけ……。

「いかせない……………」

目の前で手を広げたミヨナを無理やり押しつけて麻緒梨の居場所をナースに聞き出し、駆けつけた。

ミヨナはよろけ、俺はやっとの思いで部屋を見つけた。

「麻緒梨……………」

そこには包帯をぐるぐる巻きにされた麻緒梨が寝ていた。

「悟夢……………どうして……………どうしてあたしを見てくれないの!?!」

「あ?」

「どうしてあたしがいるのにこいつばっか見るの!?!」

「うるせえな。だまれよ。」

「ねえ!それはほとんど死人なんだよ!?!」

「死んでねえ!!生きてる!麻緒梨は生きてる!!!」

「でも!」

「だまれよ、うそつき女!!!」

「……………!!!!ひどい。」

俺は必死に植物人間状態にならないことを祈った。

どうして俺は忘れていたんだろう。

忘れていられることが出来たんだろう。

やっとの思いで掴み取った幸せを。

どうして再び危機に陥れてしまったのだろう。

生きてくれ。

生きて、生きててくれ。

自分に嫌気がさす。

一度守った命。

それを忘れて今までのうとうとすくしていた自分に。

それからというものの、毎日のように通った。
麻緒梨はいつも、どんなことを思って俺のところに来てくれていたんだろう。

いつも記憶の戻らない俺を見ていてなんと思っただろう。
どうして自分が彼女だと言ってくれなかったのだろう。

いや、言ってもきつと思いつき出さないと分かっていたから言わなかったのかもしれない。

頭を打ったせいでまだ頭がいたむ。

でも、植物人間になりかけてる麻緒梨を見ると、頭なんてどうでもよくなってしまう。

ただ、生きててくれ。

明日には目が覚めてくれ。

そればかり。

病室の目の前に経つと、麻緒梨がベッドから起き上がって笑いかけられるかもしれない。

あほらしい妄想が浮かんでは消える。

「麻緒梨………マールオ、そろそろ起きようぜ？」

そろそろ帰る時間が迫ってきた。

立ち上がった瞬間。

麻緒梨の目が開いた。

薄目でも俺にとっては嬉しかった。

「麻緒梨!!!」

反応はない。

まさか本当に植物人間に………?

不安が募る。

「………誰？」

「………は？」

言葉を発したことに安堵し、同時に耳を疑った。

予期しなかった言葉だった。

「………あなた、誰？」

悔しかった。

なにより悲しかった。

自分を覚えていないという真実。

よく辛抱したな……お前。

「俺は……お前の彼氏。」

「彼氏? ……違う。あたしの彼氏、別れたから。」

「は? 俺、別れる気ねえよ?」

「違う……あたし、新しい彼氏がほしかったの。だからミヨナといろんなところいくの。約束なの。」

「ミヨナ……?」

「お前、過去のこと覚えてるのか?」

「当然でしょう?」

「俺の顔は?」

「……分からない。」

俺だけ……思い出してもらえない……?
景色が一瞬とんだ。

「あなた……名前は?」

「……悟夢。」

「サトム? あたしの名前はね……。」

「知ってるよ。麻緒梨。」

「……ごめんね。」

「何が?」

「分からないけど……ごめんね。お願いだからそんな悲し
そうな顔、しないで?」

「してねえよ! 俺ちよつとナースステーションに知らせてくるわ!
お前の意識が戻ったって。」

俺は走った。

辛い。

苦しい。

重たい。

誰でもいい。

俺を慰めてくれ。

誰でもいいんだ。

ナスステーションに知らせる。

「そう、ありがとう。」

そうして帰ろうとすると、呼び止められた。

「まって!!」

振り返ると、そこにはよたよたになった麻緒梨がいた。

「なにしてるの!? あなたはまだ寝てなきゃだめよ!!」

ナスさんが駆け寄る。

「また……きてね?あなたのお話……聞かせて。」

同じ顔、声、体。

同じ笑顔。

でも、俺のことを覚えていない彼女は髪の毛をくしゃくしゃにしたまま笑った。

その笑顔を断ることが出来なくて、辛いのに、「ああ。」と叫ぶうなずいた。

次の日も、俺は麻緒梨のところへ約束どおり会いに行った。

そこには小さい子供と楽しそうに目を細めながら話す麻緒梨の姿があった。

車椅子に乗っている。

麻緒梨は俺に気づくと、子供に手を振って俺のほうに近づいてきた。

「きてくれたんだね。」

「ああ。」

「背、高いね。」

「お前が車椅子だからじゃね?」

「これ?あのね、しばらく動かなくて筋肉がなくなっちゃってるから手からでもリハビリを始めて、手を振ることは簡単に出来るようになったの。ただ、問題は立てるけどあんまり歩けなくて。あたしっていつたい何日寝っぱなしだったんだろ?」

「そうだな……しばらく意識がなくて……長かったよ。」

「ねえ聞かせて。あたしの彼氏だったんでしょ？」

「ああ、そうだな。」

いろんなことを聞かせた。

そのたび、楽しそうにうんうんとうなずいていたが、ミヨナの話になるにつれ、表情は曇っていった。

第22話：真実

ついにミヨナの話になった。

ほとんど愚痴にしかきこえない。

そうしてあいつか麻緒梨を利用しようとした話しにさしかかったとたん、麻緒梨は思い切り車椅子をたたいた。

「もういい！言わないで！」

「麻緒莉……」

「ミヨナはそんなひどい子じゃない！どうしてミヨナをそんなに悪く言うの！？」

「実際の話なんだ。」

「嘘だよ！そんなの嘘！あたしは友達だったんだから！何も知らないあなたにとやかく言われたくない！」

あなた……

あなた……？

言葉が胸に突き刺さる。

「じゃあ一つ聞く、お前たちの仲を俺が壊してなんのメリットがある？」

「……わかんない……けど！」

「もういい。話すだけ無駄だ。」

立ち上がってそのまま外に出た。

「あつー！」

追いかけてようとしたらしいが、俺のほうじゃ早かった。

しばらく離れていようと思った。

そうして数日後。

会に行くのと、あいつはナースさんと話をしていた。

「ねえ、よくお見舞いに来てくれる人が自分の彼氏なんだっていきなり言われたらやっぱり付き合うべきなんですか？」

「さあね。あなたはその人のこと好きなの？」

「分からないし、でも、彼氏って言うんだったら付き合ったほうがいいんじゃないかと思う。」

「じゃあそうすれば？」

「そうですね。もし終わっても次にいけばいいか。」
突き刺さる言葉の数々。

簡単に次を見つけるのか？

「そんな簡単なものなの？」

「でも、責任みたいなの感じちゃって。」
責任………？

そうか………俺のことが分からないんだもんね。

こうなることを恐れたのか。

お前は………だから、俺に彼女だということを言わなかった。
また、責任とかじゃなく、心から好きになってもらうために………

自分が同じ立場に立ってようやく理解した。

でも、遅すぎる。

同じ立場になった後じゃ遅すぎるんだ。

誰でもいい。

誰でもいいよもう。

誰か………助けてくれ。

で………いつ俺はミヨナのところに着たんだろう。

どうして隣でこいつが寝てるんだろう。

記憶のない自分が恐ろしい。

第33話：もう一度。

あたしが入院してから何日かが経った後、一度も顔を出さなかった
ミヨナがひよっこり顔を出した。
それも、勝ち誇った顔をして

「ミヨナ!!ごめんね!携帯壊れて連絡取れなくて」
「その顔^{ツラ}見てるだけで反吐が出るわ。」

ミヨナがはき捨てた言葉に一瞬耳を疑った。
まさか

そんな馬鹿な。

「え?と、ところでどうしてここにいることが分かったの?」

私は必死に話を変えた。

「悟夢に聞いたからよ。」

「え知り合いだったの!?あ、そっか、そう言ってたもんね。」

「知り合いじゃないわよ。あたしの彼氏なんだから。」

「え?でも、彼は私の彼氏だって言ってたよ?」

「何言ってるの?あたしのほうを選んだのよ。あたしのほうがあんなよりずっと好きだったんだからね!!」

何?

なんでどうしてミヨナはこんなにつめたいの?

あたしに突っかかってくるの?

「あたしたち友達だったよね?」

ミヨナはにこりと笑った。

あたしはその向けられた笑顔に少し安心した。

でも急変。

「あんたと友達?やめてよ冗談じゃない。あんたがもてるって調子

乗ってるから友達いなさそうだなあつて哀れんであたしのそばに
いておいただけ。」

顔と毒々しい言葉があまりに違いすぎて、何が起こってるのかわか
らない。

「親友つて………言つてたよね………?」

「は? キャハハハ! ちよつとやめてよ。あんたと親友なんて一度
も思つたことないんですけど。それにあんたと一緒にいたらヤリマ
ン女として同類にされちゃうじゃない。ホント………へどが
出ちゃう!」

狂つたように笑い出し、息が乱れているミヨナ。

嘘でしょ………?

「そういうわけで………じゃ………あたしたちの邪魔、
今後一切しないでよね!」

Bannon! 」

という音が響いて病室を移されていたあたしとそのまわりの人々は
その音に体をこわばらせた。

ミヨナが勢いよく扉を閉めたのだ。

周りにはカーテンで仕切られただけの部屋と人が最低でもあたし含
め四人はいる。

「何があつたの………?」

そんな声がカーテンを通して聞こえてくる。

あたしはよたよたと外に出ると、カーテンから顔を出していた人た
ちが一斉にあたしのほうを向いた。

この部屋には、四人以上の人がすでにいた………。

「ちよつと君、今みたいなのは困るんだよね。」

「………すみません。」

「喧嘩してたみたいだけど………大丈夫………?」

「………すみません………。」

「誤らなくてもいいのよ、ただ、以後少し気をつけてね。ココの人
ね………少し心臓が悪いのよ。」

「本当に……すみませんでした……以後……
・気をつけますので……」
心配する人、怒る人、驚いたまんまの人、興味ありげにあたしを見上げる子供。

今顔を出している人でも5人いる。

足して9だ。

もういやだ。

信じてたのに。

親友だと思ってたのに。

嫌われた。

いや、もともと好きじゃないといわれた。

もともと嫌いだったと……。

悟夢君の話は本当のことだった。

でもなんで？

なんで実話を知ってる張本人がミヨナのところへいったの？

あなたもあたしを裏切ったの？

それとも……もともとあたしなんてどうでも良かったの？

ミヨナが最初つからよかったの？

じゃあどうしてあたしが目覚めたとき、一番初めがあなただったの？

やっぱりあたし……目覚めなければ良かった。

お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん。

……みんなどうしてあたしだけを残していくの？

どうしてあたしの体はちやくちやくと直っていくのに記憶は戻らな

いの？

どうしてあたしを連れて行ってくれなかったの？

あたしにチャンスはくれないの？

もう一度ちゃんとそっちに行きたい。

行きたいよ……。

みんな……。

第33話：もう一度。（後書き）

ミヨナが………残酷すぎます………。
感情が激しいキャラはかいてて楽しいですが………ミヨナは
逆に痛々しいです。

第24話：偽りの仲間

あたしにもう一度そっちに行かせてもらえるチャンスは訪れないまま退院することになった。

厄介払いされたように過ぎた入院の日々。

家事や家族のことで忙しいのは分かっていた。

でも、あたしの“保護者”は一度も病院へこなかった。

あたしはいつでもものけ者だ。

どの家にいつても。

本気で怒られることも、本気で心配されることもない。

心配してくれるのは裏切りを知らない子供たちだけ。

だからあたしは妹や弟を家族と呼べる。

居心地の悪い家。

心を開かないあたしを気味悪がるあたしの“保護者”

あたしは彼らをさん付けで呼ぶし、用がない限り、絶対に話しかけない。

家にもバイトばっかでない。

そのうちカラダを壊すと誰かに言われた。

そんなのどうでも良かった。

愛されたかった。

あたしも誰かを愛したかった。

心のそこからあたしを受け入れてくれる人に出会いたかった。

そんな時、自分に似た誰かに出会った気がする。

思い出したい。

思い出せない。

思い出したい。

思い出せない。

葛藤が始まる。

なんで思い出せないの？

思い出すのさえ辛い記憶なの？

あたしは誰に出会ったの？

あたしはどうしてその人に惹かれたの？

あたしはどうして………。

「如月さん？」

そんなとき、看護師さんから呼ばれてはっとする。

「準備はもういいですか？」

「はい。」

「ご両親がお迎えに来てくださってますよ。」

「………そうですか。」

「無事、退院おめでとございます。」

ココにいたくはない。

喧嘩した記憶しかない。

でも、かといって“家”なんてあんなかたつくるしいところ、いたくない。

でもあたしはにこりと笑って頭を下げた。

「みなさん、いままでお世話になりました。」

部屋に一礼し、看護師さんにも一礼する。

「いままでありがとうございました。」

「お大事に。」

そうしてあたしは病棟の外へ出た。

そこにはさぞ心配した。みたいな保護者の姿があった。

うろろろする如月さん（奥さん）

車の窓から顔を出し、あたりを見渡している如月さん（旦那さん）

そしてそれを冷やかな目で見る如月^{あたし}

それだけ心配そうなそぶりは見せられるのに一度もあたしのところに来なかつた人たち。

でも、いい。

こんな人たちどうでもいい。

二年もしたらそっこうお去らばよ。

「お待たせしました。」

にこりと如月夫婦に笑いかける。

二人は安心したように顔を歪ませ、ため息をついた。

「さあ、車に乗って？」

如月さん（奥さんのほう）が車の後部座席の扉を開く。

「ご心配おかけしてすみませんでした。」

深々と頭を下げる。

「私たちのほうこそお見舞いに一度もいけなくてごめんなさいね。」

「いいえ。お忙しいのは分かっていますし……それに」

迷惑はかけられませんから。」

さらつと言つて、扉がぱたんと閉まる音を聞き、再び、ガチャつと

扉の開く音を聞く。

奥さんはだんなさんの隣に座り込む。

何度か座りなおしたため、車内がゆれた。

そして再び戸が閉まる音がする。

如月さんは夫婦そろってシートベルト締めるとあたしにもシートベルトを閉めるように促して車は発射した。

第25話：大気

失った………。

あたしは………。

すべてを失ったんだ。

彼氏がいない。

作ればいい。

簡単なのはなし。

でも、簡単じゃない。

とこか違う。

駄目。

誰かじゃないと駄目。

あたしを優しく包んでくれた。

頭に記憶が残ってなくても、体が覚えている。

本能的に覚えている。

誰？

誰？

誰なの？

車の窓から流れる景色を見ながら考え事していると雨が降ってきたことに気づいた。

雨はぽつぽつと窓に雫を斜めに走らせていくが、どんどん雫の流れは速くなり、やがて窓には沢山の水流、小さな川が出来た。

「雨が降ってきたわね。」

憂鬱そうに奥さんはつぶやき、まだ幼い子供のことを思っていた。

この人たちの会話は大体聞こえてくる。

どこからか聞きたくもないのにあたしの元に忍び寄ってくる。

まだ保育園にあずけるにははやかったかしらね、とか。

お兄ちゃんはどう思ってるんだろうな、年端もそう変わらない女の子がいると知ってる………とか。

家族、
家族。
家族！

聞きたくもない平和ボケした会話が忍び寄ってはあたしを苦しませる。

いてほしくないなら、次の家に回せばいい。

無理に居座る気なんかこっちにもないよ。

あたしはもう一度家族に会いたい。

形だけの保護者なんかじゃなくて。

小さなため息を漏らした。

誰にも気づかれぬように、小さく小さく。

ついに雨は車体の屋根をこつこつとたたき始めるほどに大粒になった。

窓は………あゝあ、手遅れ。

大洪水。

まるであたしのとまらない疑問みたい。

懐かしい。

あの人、会いたい。

あの場所、行きたい。

それがどこで、何なのか。

それはどこの誰なのかもわからない。

なのに、いとしい。

いとしくて仕方ない。

その人じゃなきゃ駄目だとカラダがあたしに教える。

その人とあたしはどこまでいったっていうのよ？

どうしてミヨナはあんな仕打ちみたいにあたしにいちいち報告しに来たの？

どうして反吐が出るヤツの顔を見に来たの？

わかんない。

何もかも、わかんない。

外をじつと眺めるフリをしてあたしは泣いた。

勝手に涙は流れた。

とまらなかつた。

悔しい。

嫌い。

好き。

いとしい。

恋しい。

もう何がなんだかわかんなくなる。

裏切られた。

もう嫌い。

でもまだ好き。

そんな感じに矛盾してる。

嫌いなのに好き。

好きなのに嫌い。

入院中に知ったことは実際の一部で、それだけなのにすべてがめまぐるしく変わっていく。

苦しい。

辛い。

やめてしまえばいい。

でも、手放せない。

回る。

せかいは回っていく。

時間は無力だ。

そしてそれは時になによりも強い。

この地球上では微生物が生まれ、プランクトンやバクテリアからそれは海の生き物として変化を遂げた。

そして水中に生きていた生物は陸に上がり、ハイや足を持つようになった。

陸上ではすでに森林が生まれていて、熱も、空気も、水もそろって

いた。

そしていずれかそれは虫になり、恐竜になり、獣になったりしてその過程があつて私たちはここにいる。
今存在している。

すべては偶然にして生まれてきた命。

でも、本当に偶然？

何もないところに水が生まれて、太陽も、月も、森林も生まれていた。

すべてが偶然としか言いようがないんだろう。

けど、あたしにはそう思えない。

多分宗教とかやってる人は人間が使命を帯びて生まれてきたんだとか、いろいろ言っちゃうんだろうけど。

使命とかじゃない。

確かに科学的根拠なしに今どうやって人が成り立ってるのかなんてわからない。

でも、あたしは思うの。

科学だけで説明できるものがすべてじゃないって。

すべてにはすべて意思があつて、ほら……よく言うじゃない？

この世に偶然はない、すべて必然なのだとか。

あたしはそういうことあんまり良くわかんないし、神もいるのか分からない。

けど、偶然だけで片付けることって出来ないんじゃないかって思うんだ。

だからね……あたしって何のために生まれてきたんだろうって思うときある。

いろんな過程を踏んで、今ここに自分はあるわけだけど、地球にとって有害なのは人間だけだつて。

人間はこの惑星にとって有害で、それはいまだに文化を発展させていくのどうしてあたしたちは生まれてきたんだろうって。

あたしは空気になりたかった。

そうすれば生きることも死ぬことも気にしなくてよかった。

それに、裏切られることも、記憶に関するコトだって、両親にだってこんな悲しみを抱かなくて良かったかもしれないのにつて。

どの惑星にも存在する大気。

それが酸素のOだとか窒素のNだとか水素のHだとかなんてどうでもいい。

ただ、そこに存在してもウザがられずに自然に受け入れてもらえるものになりたかった。

好かれることも、嫌われることもない大気に……。

そんなこと考えてる時点でもう人間で、大気なんかじゃないんだ。でも、こんな悲しみにくれるくらいならあたしの存在なんてあったってなくて同じじゃないかと思ってしまう。

だれかあたしを愛して。

あたしも思いつきり人間でよかったって思えるくらい誰かを愛したい。

愛したいの

……。

第25話：大気（後書き）

みなさんも麻緒梨みたいなこと思うことありませんか？

なんで自分ってあるんだろって。

……… 思わないですよ。

思う人はいるんでしょうけど、私はよく変わり者って目で見られるので大体こういう考えは誰にも言わなかったりします。

どうしてその過程が成り立って、どうして精密に作られた体が人間で、その人間は惑星にとって有害なのに誕生したのか。

変人ですね……… はい、すみませんでした………。

第26話：会いたい。

思い出せないままあたしは学校へ行っているところによった。駅に行きたい……………。

でも、どこの駅？

着いた先は大きな駅だった。

大きな駅で、ガラスが鏡のように光っている。

って言うのは冗談で、少しくすんだガラスがあたしを映し出していた。

「会いたいよ……………悟夢。」

え？

あたし今、ミヨナの彼氏、呼んだ？

雨が降り始めた。

ああ……………。

あたしたちはココで出会ったんだね。

そうか、あたし、ミヨナを置き去りにしたんだ。

記憶がまだらに戻ってくる。

そして戻ってくる映像の一つ一つをかき集めると、それはスローム

ービーのように流れはじめた。

涙が流れる。

その場に座り込んでしまった。

だめ……………好き。

でも……………だめ。

もう元には戻れない。

悟夢は……………あたしじゃなくて、ミヨナを選んだ。

あの日、あの時はあたしを選んでくれても。

今は悟夢はミヨナを選んだんだ……………。

駄目。

どうかあふれないで。

あたしの気持ち。

どうか……どうかあふれないで。

どうか今すぐ……会いに行きたいと思う。

けど、駄目。

会っちゃ駄目。

また壊すことなんかできない。

会いたい。

会いに走りたい。

ねえ……会いたいよ。

でも……だめ。

あふれ出す気持ちも後もう少しだけ我慢して……。

次こそは新しい彼氏を作って見せるから。

また……新しい彼氏を作るんだから……。

「麻緒梨？」

あたしは思わず勢いよく振り向いた。

もしかしたら悟夢かも知れないと思ったから。

「おわつ。」

そこにいたのは悟夢よりずっと真面目そうな一人の男子。

「え……純太じゅんた……？」

純太はあたしの前の前の彼氏だった。

駅の方角も違つて、他校生つてこともあつてちつとも会わなかつた。

まったく会わないまま半年が流れようとしてた。

「なに泣いてんだよ？」

「そんなことより！どうして純太が……ここにいるの？」

「そんなことよりつて……いちや悪い？麻緒梨に会いにき

たんだよ。」

「え……？」

あたしはなんていわれたのか良くわからなくなって、頭が真っ白になつた。

第27話：忘れてしまいたい。

「え？じゃないよ。思ったんだ。俺……麻緒梨が好きだ。」

「何言つて……そうだよ！彼女いたじゃん！」

「元カノとわかれた。気づいたんだ俺、麻緒梨と彼女を比べてた。」

「はあ？」

「昔の俺、ちっちゃい男だったよな。今もそれはもしかしたら変わらないのかもしれない。だけど、もう一度俺のこと考えてくれないか？」

「え？何言ってるの？」

あたしの頭は錯乱状態だった。

「麻緒梨のこと、出来る限り泣かせないようにする。俺なら、絶対こんなところで泣いてる麻緒梨を一人ぼっちになんかしらない。」

「え……え？」

「だから考えてくれないか？」

「……分かった……いいよ。もう一度、付き合ってみようか？」

このまま悟夢を好きでいるのは辛い。

もうこんな思いはしたくない。

あたしは簡単な方向ににげた。

純太はあたしのこと大切に思ってくれてた。

だけど、束縛が多すぎて嫌になつて別れた相手だった。

なににあたしはそれにすがりついた。

辛かった。

ミヨナに言われたことも、追い討ちをかけるように悟夢があたしの前から消えたことも。

みんな全部全部辛かった。

忘れてしまいたかった。

それから数週間がたった。

なんか、本当に純太……かわった。

少し、大人っぽくなったのもあるかもしれない。

それになんだか、すっごく気さくになって、まるで友達……
みたい……。

ある日、あたしの校門の前で純太がまっていた。

「純太！え？なんで？学校は？」

「今日はちよつとね。」

「さぼったの？」

周りの目がいたい。

「また男替えたよ……。」

「ヤリマン女ならぬヤリマオリ？」

「ぎゃははは！！それ、冗談キツツイ！！」

あたしは思わず黙り込んで下を向いた。

すると、純太はあたしを抱きしめた。

「うわあ！！」

「勝手なことやってんじゃねえよ！てめえらに麻緒梨の何が分かるんだ！」

「なにアイツ。」

「頭おかしいんじゃない？」

「いこいこ。」

え……今の言葉……純太が言ったの？

前は頼りない感じの本当、草食男子って感じだったのに……。

「じゅ……純太……？」

「ったくあいつら……て、あ、悪い。痛かったか？」

あたしをぱつと放す。

「ち、違うの……その、驚いたし、それに……あ……
……りがと……ね……。」

ぎこちなく右手で左腕を持った。

純太にしてはなれないことをされ、顔が赤くなる。

「ぶっ……なにそれ、ツンデレ？」

「人がお礼言ってるのに、わ、わらうとかひどいし！」

そういつてこぶしを握り締め、高くかざすと純太の顔を見た。思わず、手が下に下りた。

「……純太の顔、まっかあ……」

「そ、そうだよ！わりいか！」

そういいながら片手で顔を隠す純太。

なんだろ……純太なのに。

終わった相手なのに、どきどきする。

なんかかわいいや。

「純太、変わったね。」

あたしのいきなりの言葉に少々純太は驚いたらしかった。

「そうかな。」

「うん。元カノさんが純太をそこまで変えたんだね。」

「……は？いや、アイツが俺を変えたんじゃないよ？俺の意思だし。」

「どうかな？」

そしてタタタツと歩き始めてピタツととまった。

「……」

「麻緒梨？」

「どうしているの？」

「どうしてあたしの目の前に立ってるの？」

「どうしてまたあの時と同じ顔で立ってるの？」

「あたしはあなたを忘れたいのに。」

「病院の出来事もすべて消し去ってしまいたいのに……」

第28話：失った。

「ミ……ヨナ……。」

純太が立ち止まった。

「ミヨナちゃんだ。久しぶり。」

「久しぶり。」

ミヨナの笑顔にあたしは顔をそらす。

「麻緒梨？」

「つてか、純太君つてえ……まだ麻緒梨なんかと付き合ってるんだ？」

「……え？」

「アハハッなんでもないよ。そうだ、麻緒梨？あんた、悟夢にこのこと言っておくから。」

にやりと笑う顔がゾクリとする。

「言えばいいじゃない！」

売り言葉に買い言葉を発してしまったけど、このときは良く考えてなかった。

「言ったわね？」

そのままふふつと笑ってミヨナは消えた。

「悟夢？つて誰？」

「なんでもない。」

いや、駄目。

言わないで。

あたしは……悟夢がまだ……

でも、あたしにはもう……純太がいるし。

悟夢に未練なんて……

ないし……。

「麻緒梨？」

「ごめんっ！先かえらせて!!！」

走って逃げるようにあたしはいなくなつた。

その日はケータイの電源も切つて、バイトもやすんだ。もうそろそろ進級できるか考えなきゃ……。

そう、だから悟夢のことは頭から消えて。

お願いだから消えて……。

そして次の日、また校門のところに純太がいた。

あたしの姿をすぐに見つけて近づいてくる。

「や……あ……」

逃げようと思った。

でももう遅い……。

もう逃げられない……。

「まてよ！」

気づけば後ろから手を握られていた。

「なんで逃げようとするんだ!？」

「え……その、別に。」

今は会いたくなかった。

しばらく会いたくなかった。

悟夢、その一言だけでここまで感情がおかしくなるなんて……

・思つても見なかった。

「逃げようとしてるだろ！」

「純太……放して……あたし……あたし、

ちよつと考えたいことがあつて……その、ミヨナともいる

いるあつて……」

しどろもどろになりながらどうして自分がココまでなにかに動揺し

ているのかが分からなかった。

ただ、もうしばらく一人でいたいだけだった。

「俺に言ってくれ。力になる。だから俺から逃げようとしなくて

くれ。」

「……うん……わかった。」

素直にうなずいている自分に驚いてしまう。

話せといわれたって何から話せばいいのかなんてわからない。
校門を出たところでまたあたしは逃げたくなった。
もう嫌だ。

どうしているの？

なんでまたいるの？

「悟夢……………」

「あいつから聞いた。そうか。そういうことだったか。だから俺はもう必要ないってことだよな。記憶も……………ないもんな。」
「さつとむう！あれえ？むかえにきてくれたのお？嬉しいなあ。あれ、麻緒梨と純太君じゃあん？なにしてえんのお？」

わざとらしく語尾を延ばすミヨナ。

そっぴいなながら悟夢の腕に腕や手を絡み付けている。

すこし、吐き気がする。

もうだめ……………」

「……………う……………オエエエ……………」

「つげえ！きつたねえ〜！！」

「麻緒梨！！」

「じゅ……………た……………ごめ……………ごめん……………」

すると、純太は何を思ったか、堂々と悟夢の前に立ち、啖呵をきつた。

「てめえが麻緒梨の元彼氏だかなんだかしらねえけど！好きな女振り回して何が楽しいんだ！未練がないなら二度と麻緒梨の前にあらわれんな！！」

「こわあい。」

ミヨナの手を振り払い、悟夢は何も言わずにきびすを返していった。

「大丈夫？麻緒梨。」

「純太……………どうして……………むかってっただの？」

「麻緒梨見てたら耐えられなくなった……………ごめん。でも、こわいより、守りたいと思ったんだ。」

本当にすまなさそうなしよぼんとした顔つきになる。

ごめんね……ごめんね……。

あたしのせいだよ。

純太をここまで無理やり替えちゃったのも。

ありのままの純太を受け入れてあげられなかったのも……。

「ごめんね……純太……ごめんね……。」

純太は困惑した顔になった。

そしてすぐ、傷ついた顔になった。

「そんなにアイツのことが……好きだよ……？」

あたしは黙ってうなづいた。

「どうして俺じゃ駄目なんだよ？」

どうして……どうして？

でも、暖かい家庭じゃなかったからこそあたしと悟夢は通じ合えたんだと思うんだ。

それに……あたしじゃなくて、ミヨナを選んだのは悟夢じやん。

なのにどうしていまさらこんな風にあたしの目の前に立つの？

どうしてあたしを責めるようなことを言うの？

記憶なら戻ったよ。

戻った。

全部……病院で悟夢がミヨナを抱こうとしてたことも。

悟夢があたしを睨みつけたことも。

記憶が戻ってないのはむしろ悟夢なんじゃないの？

なのにどうして現れるの？

どうしてあのところのようにその口で、同じ姿、声であたしの名前を呼ぶの？

あたしが狂ってるくらいあなたが好きなのに……。

あなたが……好きなのにミヨナを選んだんじゃない。

再び戻しそうになる。

我慢しなきゃ。

「ごめん……純太……でも、ありがとう。純太のこと、あたし……好きだよ。だけど……ごめん……あたしは……純太に今は会いたくなかった。悟夢に会う前に出会いたかった……ごめん……ごめんね……。」

「わかった……もういい。せめて家までおくらせて。」
あたしはしずかにうなづいた。

それからの毎日、地獄のようだった。

永遠の地獄、失った。

あたしは……すべて失った。

第29話：あきらめられない。（前書き）

今回のお話にはグロテスクなシーンが沢山ありますので、グロイのは無理！という方は読まないでください。

第29話：あきらめられない。

もういやだ………。

どうして俺は今、こんな状況になっている？

イライラしてはミヨナを都合よく犯す。

そんな日が続いている。

麻緒梨だって彼氏くらいできるだろう。

なのにどうして確認しに言ったんだろう。

確認なんかしに行かなければよかった。

じゆんたとかいった………あいつの目、確かに俺を捕らえてやがった。

愛しいと思うものを全力で守ろうとする目。

俺も、あんな目をしていたことがあったんだろうか？

俺だって出来るなら麻緒梨を守ってやりたい。

そばにいたい。

笑わせてやりてえよ。

けど………記憶を失った麻緒梨にとって俺は他人同然で………

俺は麻緒梨みたいに考えることは出来ない。

記憶がなくても、また一からはじめればいいなんて思えない。

無理だ。

毎晩麻緒梨とであつた駅の前に立つ。

麻緒梨の家の下まで行くこともある。

にぎやかにともっている光の下に、麻緒梨はいるんだろうか………

……笑ってるんだろうか。

そればかり。

そしてまた習慣づいてしまったらしく、家の前に立っていた。

これじゃ痴漢だ。

くそ………かえろう。

「………悟夢………?」

呼ばれて前を見ると、やせ細った麻緒梨の姿があった。

「どうしているの………」

小さくか細い声。

「おまえ、家に居るんじゃない………」

「どうしてあたしの前に現れるの!？」

麻緒梨はわっと泣き出した。

「彼氏がいるのに来て悪かったな………」

「おしえて………教えてよ!どうやってたら悟夢のこと忘れら

れるの?どうしたらいいの?どうして………どうしてあたし

はあなたをあきらめられないの!？」

はあ?

「俺が聞きてえよ。」

麻緒梨はぱつと顔を上げた。

「あたしじゃなくてミヨナを選んだくせに!！」

「お前だって純太とかゆうやろうを選んだじゃねえか!！」

「それは悟夢がいなくなった後だもん!それにいまはいないもん!

!」

今はいないもんといいなから泣きじゃくる麻緒梨に戸惑いながら嬉しさを感じている自分がいる。

「ごめん………俺、ちゃんと記憶戻ったから………やり直そう?」

修復が出来るなら。

本当はそんなかつこ悪いことしたくない。

未練なんかありません。

みたいな顔して新しい女を作ってるほうがかつこいい。

普段の俺なら………こいつに会う前の俺なら………そうだったのに。

でも、こいつの場合は駄目だった。

何でこんなに惹かれるんだろう。

どうしてこうして俺たちは何度もめぐり合っただろう。

「させない……。」

上から声がして、え？とやって顔を上げた。

そこには形相を変えたミヨナが立っていた。

包丁を振りかざして。

次の瞬間、麻緒梨の背中刺された。

血が飛び散っている。

幸い傷は浅く澄んだのか、麻緒梨はうめき声をあげた。

また包丁を振りかざすので俺はあわててミヨナをつかんだ。

「やめろ！」

「こんなヤツ……こんなヤツあたしの手を汚すまでもない虫けらだと思ってた！なのになんでまだこの期に及んでまだあたしに悟夢をくれないのよ！？」

そうわめきながら暴れている。

そして包丁の先が俺に向けられた。

こいつ……目がおかしい。

あわてて離れる。

その目に一瞬哀れみに似た何かが通り過ぎて言った。

「お前……薬やつたな……。」

しかも短期間にかなり大量にだ。

「悟夢も悟夢よ……あたしがいるのにこいつを選ぶんだから……こいつと悟夢のお墓は絶対一緒にしてあげないつもりだったけどこいつをかばうならいいわ……悟夢を殺してあたしも死ぬ！！」

包丁をさつき振りかざしたからだろう……ミヨナの手も同時に切れて、血を滴らせている。

「愛してる……愛してるの……なのはどうしてあなたは……あたしを見てくれないの？あなたはあたしのものでしょうか？」

駄目こいつ……もう完璧に目が逝っている。

第29話：あきらめられない。（後書き）

今回しようせつの中で薬使用が出てきましたが、中でも“短期間で” “大量に” というのはもっとも危険です。

（大麻などの）薬は法律上、所持、使用は日本では認められていません。

この小説は100%フィクションですが、ミヨナのようなまねは絶対しないでください。

第30話：最終話

・・・・・・・・ふつと意識が戻った。

隣には麻緒梨がいて、包帯は巻かれていないようにみえる。

「悟夢。」

麻緒梨は涙を流していた。

「無事でよかった・・・・・・・・麻緒莉。」

「あたしも・・・・・・・・悟夢が無事でよかった。でも、ミヨナが・・・・・・・・死んじゃったの。」

話を聞くとやっぱり薬で完璧におかしくなっていたらしい。

泣きじゃくる麻緒梨。

「そんな泣くなつて。」

起き上がったとたんカラダに激痛が走った。

「あたし、最低だよね・・・・・・・・またミヨナから悟夢奪って・・・・・・・・ミヨナまで殺しちゃうなんて。」

「アイツはおかしくなってたんだよ。自分を責めるなつて。」

俺は・・・・・・・・どこを刺されたんだろう。

ああ、胸の辺りか。

俺たちはもうきつと・・・・・・・・離れないでいけるだろう。

「あた・・・・・・・・し・・・・・・・・もう、自分が嫌になる・・・・・・・・

・純太傷つけて・・・・・・・・ミヨナも傷つけて・・・・・・・・あたしのせいで今度は悟夢にいつぱい・・・・・・・・いつぱい危険な目にあわせて、も・・・・・・・・嫌になる・・・・・・・・こんな自分が嫌で嫌で仕方ない。」

「しょうがねえだろ？忘れられなかったんだから。」

そう、何度だって手放されて遠くへ行つた。

何度も傷つけあつた。

何度もすれ違つた。

何度も、何度も。

一度はお互いに記憶さえ失つた。

自分が存在する理由が分からなくなって他人に甘えたり、やっぱり違ふと思つていろんな人を傷つけてきた。

傷つけずに通る道はなかつた。

お互いを求めたらそれはどんな他者が入るうとも屈しない強い思いを持つてしまった。

それだけのはずだつた。

それが大きくなって、ついには死者という犠牲を出した。

どうしてそこまでしてそばにいたのか、そばにい続けたのかつたのか、分からない。

ただ、思いが強かつただけなのかもしれない。

それは、はたから見れば重いといわれるものなのかもしれない。

でも、それでもめぐり合つた。

めぐり合わされた。

麻緒梨に

悟夢に

だから誓おう。

『もう、離れないで』

そしてもう、逃しはしない。

気づいてしまったらもう、“それ”にはあらがえないんだ。

『二人でずっと』

時に永遠は存在しない。

存在するのは進むことを知っている人間の中にしかない。

だけど、ずっと先まで。

どんな困難があっても立ち向かっていこう。

先まで。

『君と一緒に怖くない』

何があるか分からない未来でも、

君と一緒になら

二人が一緒なら

いろんなものに出会って、いろんなものを得よう。

これから先を描いてみよう

第30話：最終話（後書き）

はい、ここまで読んでくださった皆様に感謝いたします。書いてる途中で感想がなかったのであんまり面白くないんだなとか、アクセス数が日に日に下がっていくなとか思っていたので無理やり終わらせるかやめるかで悩みました。ですが、ここまで続けられたのも皆様のおかげです。ありがとうございました。

やっぱり未熟者の小説はあんまりでも、書ききることが“大事”ですよね。

そんなこんなですが、無事終了できました。ありがとうございました。

恋愛依存症の二人の

出会い・・・・・・・・。。

それがすべてを変えていく。

。。
真の愛を得るまで…………。。
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4719f/>

。。○真の愛を得るまで.....○。。

2010年12月4日05時33分発行